

自延享二年
至寶曆元年

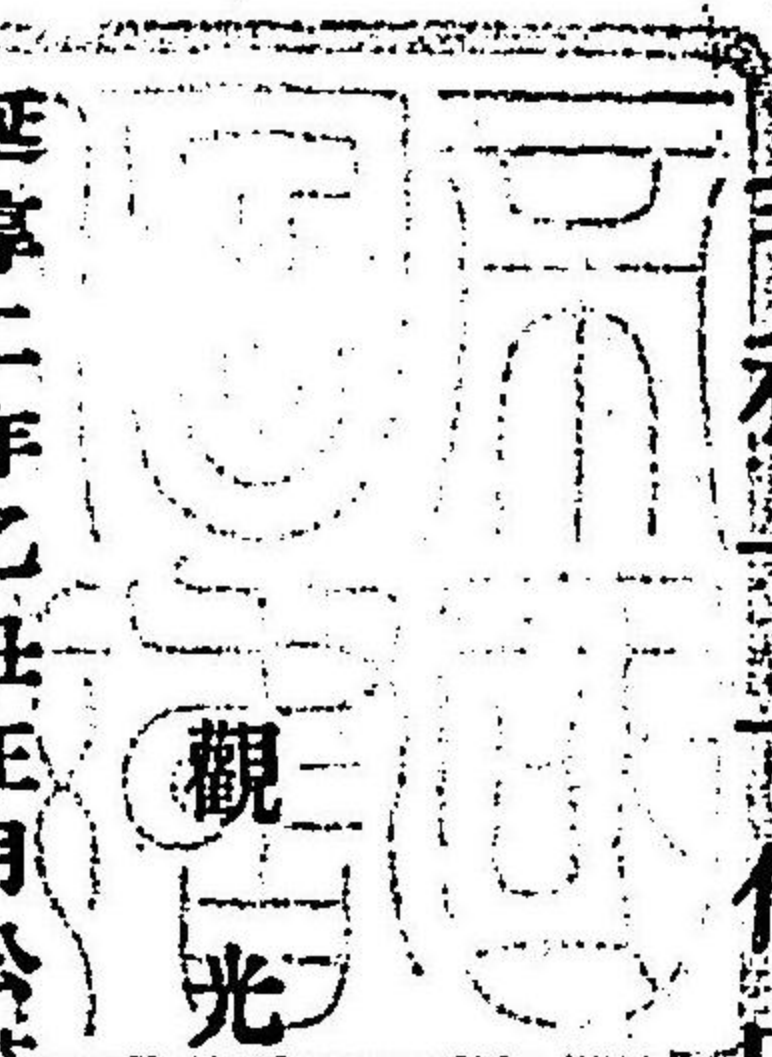
毛利十一代史

第二十六册

觀光公記

毛利十一代史卷之六十五

大田報助編



公記八

明治
43.10.25
寄贈

延享二年乙丑正月公秋ニアリ

廿日遠近方三戸與右衛門ニ營職手元役ヲ命ス周田孫兵衛ニ遠近方ヲ命ス

廿七日將軍驛傳奉書ヲ以テ鷹捉ノ鶴ヲ賜フ二月七日萩ニ於テ拜受

二月二日地陸士通中村治右衛門妻嫡子萬次郎行蹟不良ノ故ヲ以テ殺害セリ實子養

子タリ共非行アレハ組頭ヘ申告處分ヲ受クヘキハ萬治ノ規定ナリ治右衛門不在中

殺害セシハ違法ニツキ妻ノ罪遁レ難キニヨリ治右衛門ニ逼塞ヲ命ス

六日長壽夫人吉就古稀ヲ賀シ連歌興行懷紙進セラルル二十三日祝筵ヲ開キ小袖一襲

鳩杖鹽鶴一隻三幅軸物進セラル

九日吉敷那阿知須浦出火屋舎大小二百三十餘焼亡

十二日毛利讃岐守江戸邸類焼相府年表

十五日仲子文右衛門棟本宗貞數年明倫館入寮勉力ニヨリ文右衛門ニ銀一枚宗貞ニ銀六十目下付

廿日八組頭清水長左衛門十六年勤績辭職留任召下上一具下付

廿一日大目付回狀左ノ如シ

此間火事繁々候屋敷内外廻り彌入念被申付怪敷者候は、捕之不及届町奉行所え可被相渡候若捕違候分は不苦候
右之趣萬石以上え可被相觸候以上

丑二月

日不詳公參觀ノ時節昨年十月四日本年七月中ト命令アリシモ客冬以來咳嗽ヲ發シ大暑ノ旅行ナシ難キニヨリ五月初旬發程六月ノ初着府ノ請願許可アリ
三月五日洞春寺ニ於テ祈禱ノ七百部讀添ヲ引加へ來寅年萬部式修セラレタク結願ノトキ享保六年迄ハ能舞開催アリシモ儉政ニヨリ近年ノ如ク囃子執行ノ當職伺定

アリ

九日軍法家多田藤右衛門公ニ大星傳授完了ニヨリ之ヲ祝シ料理ヲ賜ヒ召下麻上下太刀馬代銀十枚下付

十一日山縣武兵衛ニ目付役ヲ命ス

十三日紅葉山ニ於テ法華八講ノ式行ハル東照宮三十三回ノトキ日光山ニ於テ行ハレシヲツキテ今回ハ之ヲ省略シ紅葉山ニ於テ行ハル繼川十五代史

十八日法華八講結願ニツキ太刀馬代黃金一枚二種一荷將軍へ一種一荷右大將へ獻セラル

廿六日萩原六兵衛石津新八麻布出火ノトキ三丁火消トシテ一日間三度出役ニヨリ金二百匹下付

晦日公是日ヨリ美禰郡伊佐村及吉敷郡小郡邊巡行四月十二日還城

四月日不詳毛利甲斐守江戸ヲ發ス

十五日羽立彌三右衛門西御殿引除大檢使役ヲ命ス

廿二日天樹院へ衆寮祠堂金百兩寄付セラル融芳夫人香善院永昌院菩提ノ爲ナリ

廿七日宮崎社神主吉屋主馬神道傳授ノ爲メ上京ニツキ白銀五枚下付

日不詳財政匱乏ノ爲五年間儉約簡樸ヲ要シ閣老ノ内聽ニ達セン爲メ公儀人井上半

右衛門ヲ出府セシメ本多中務大輔晉藩由緒閣老へ提出書左ノ如シ

口上覺

私儀數年不勝手罷居殊年來領内不熟の去年國中大風洪水夥敷損毛引續去年も

風水の痛莫太の儀彼是彌以至極の差間に付堅儉約仕候得共多年の差湊にて家來

扶助も難成體御座候故當年より先五ヶ年猶又重儉約仕儀御座候尤獻上物其外表

方の儀は前々之通無相違相心得罷居候此段御間柄の儀にも御座候間御内々被聞

召置可被下候以上

四月

御名

五月四日公發駕ニ臨ミ本年マタ恩命ヲ以テ諸臣祿高百石二十石懸ヲ給セラル黒印

令條老臣添書御馳走段分訓示等左ノ如シ

年來所帶不如意の上段々重き入用差湊去々去年風水の費夥敷猶又米紙下直

大坂表借銀彌増彼是礎と差間且家中の儀も一統困窮の處に數年出米申付別而心

外の事に付種々僉議におよふといへとも至當年過分の不足償の絶方便無據今年

も去年の通馳走を請るの外これなく候條其旨を存し此上銘々堅儉約を盡し且々

も取續遂奉公におゐては本望たるへし委細年寄共より申聞すへき者也

延享二年五月四日 御黒印

覺

一御家來中年來逼迫に付遂儉約候様にとの儀は前廉連々被仰聞たる儀候然共爰

應衣服屋宅の作事を始一切の器物に至迄次第に過分の風俗不相止由候銘々費

を厭候段は緩有之間敷儀に候へ共自ら協々にひかれ候而一分の儉約難仕様に

罷成甚不宜儀候此度御仕組被仰出無據御馳走出米被仰付候程の御差間に候へ

は一統の御救の御吟味は御手届不申段勿論の儀然は御家來中兎にも角にも一

分々々儉約を盡し協々の並にもかゝわらす日用の入用令省略且々も御奉公を

可遂所存肝要の儀に候不心得にて胴輩の存入を差扱銘々の思慮に不任逼迫の所帯ながら猶又造佐を入彌増の逼迫を招き始終御役相斷御扶持方等に罷成候儀銘々不心得の至候間向後の心得肝要の儀候事

一兼々被仰聞候通番入役入の振舞等不仕筈に候然處役用寄會に準へ剩響應の品事長し就中仲ヶ間の人數多面々は前役の者共新役の者え流例の様に令差圖時節柄不相應成儀にてもおのつから所存に不任過分の造佐入増傍輩の付合に令逼迫御役不相成衆も有之由候屹と右體の儀相改無用の費無之縱無據役用有之候共隨分遂儉約御役相續候様可被申談候仲ヶ間の内にても數年相務候者より存寄申達質扑の心得可爲肝要候事

一御家來中不勝手の儀に候へは御仕組内の儀都而御扶持方同前に可被相心得候供張衣服吉凶の勤其外可成程は隨分令省略強而同列にかゝわらす身體相應に一分の儉約是又肝要に候事

一來秋迄は新作事被差留候尤無據儀は得内意候上任差圖作事の願可被申出候事

一御扶持方成の面々御奉公を差止組をもはつれ御家人を離候洞前にて至極大切の儀に候處近來は或は御扶持方成在郷住宅の衆は勿論萩住宅の御扶持方成も不心得の面々は山河の獵等仕萬事無用の費を致し居形其外御法を背候者も有之様に相聞甚不謂儀に候適不心得者有之候ては心得宜敷面々にも其差別不相聞迷惑の儀御國制も不相立儀に候依之向後の儀急度吟味被仰付儀候間若不心得の者於有之は見聞候趣を以可被相答候事

一御扶持方成衆御扶持方に不相成衆にても抽諸人身持宜敷時節相應に儉約の盡吟味御奉公の覺悟仕者有之御目付中より言上候は、依其品可有御賞美候事
右之廉々 上思食の旨有之御目付中えも手堅被仰付候間能々銘々可被相心得候以上

丑五月

益 河 内

榎 遠 江

山 縫 殿

益越中
毛筑後
穴出雲

覺

近年御所帶重き御入用引續去々年御國中大風の御費彼は大坂御借銀莫大相増去暮の御繰巻及差問候へ共御家來中御馳走相續就中去々年の半知より引續候ての儀に付後年は如何様に候共去年の儀は一先軽く被仰付度御思食の旨も有之種々吟味の上御借銀持越の方便を以出米軽く被仰付御仕組相調候處其已後至去秋御國內上筋風水損にて御所務落去々年に不相替水損所春普請入用米銀も餘分の儀且宇佐えの奉幣使御通路其外去秋已來臨時不被得止儀にて御國御入用御不足御仕組の前積り大に令相違大坂の儀も持越の御借銀利分も又御新借に相成彌差湊其上御米紙段々下直旁以別而手間に相成當秋の儀は兎角運送米の石數近年の員數に多分不被相増候ては御借銀の繰巻才覺に難及此上被拾置及破にては至極大

切の境相成候段大坂より節々申越其筋難被差置趣に候然は御家頼中御馳走米の員數被相増運送被仰付の外無之候へ共此儀 上にも別而御苦勞に被思食御心入を以何卒輕き方に吟味仕候様にと被仰付尤不始于今儀ながら猶々御儉約の沙汰をも被仰付品々被盡方便候ても急度各別の出目も無之地他の御償不相成御借米銀彌增至極の御差詰眼前の儀に候へ共今年も先御借銀持越の工面にて増出米の不及沙汰當年も御家來中高百石に付米十石宛去年の通出米被仰付候無據儀とは乍申數年の逼迫御馳走も相續迷惑の儀には候へ共 上の御差問至此時各別可被仰付筋無之段致勘辨被遂御馳走大小身共に内證堅儉約の吟味を盡し且々も取續御奉公の覺悟可爲肝要候事

附借米銀納方の仕方別紙に有之候事
附愁訴願事近年の通彌被差留候事

右被存此旨組支配中えも可被申渡候以上

丑ノ五月

益河内

榎	山	益	毛	穴
遠	縫	越	筑	出
江	殿	中	後	雲

御馳走米段分覺

一高百石已上

但高百石に付現米十石懸

一高七十石已上

但高百石に付現米九石懸

一高五十石已上

但高百石に付現米七石五斗懸

一高四十石已上

但高百石に付現米六石懸

一高三十九石九斗已下

但高百石に付現米四石五斗懸

一足輕已下

但手取之現米十石に付四斗懸

一病者幼少御扶持方成之儀高百石已上の儀は高百石に付一石二斗五升宛高百石

已下之儀は夫々之段分辻出米え右之當りを以増出米被仰付候事

一米銀持合之者は勝手次第銀子にて差出候は、和市の儀は二石替御切錢の儀は

如古法五石和市被仰付候事

一寺社家御馳走の儀は惣の當りの内三步二被召上殘三步一被差除候事

一被石えは出米被差除候事

一二人扶持計の者えは出米被差免候一人扶持にても切方持合二人扶持より上に相候者の儀は出米被仰付候事

一御雇衆隠居料女中の恩扶持一步引にして被遣候事

右當丑の年御家來中より御馳走出來段分右之通候已上

丑五月

覺

連々被仰聞候通御所帶至極の御差湊去年已來愈御手詰に相成候付而不被得止事
今年も御馳走出米被仰付候御家頼中も打續候御馳走勝手差詰候趣追々歎の筋も
有之候へ共今來年坏は御家來中一統の御救一向可相成御時節にて無之候依之取
續難相成面々は御扶持方成被仰付の外無之候處當秋の所務に相當り候黃紙切手
春夏分受取候面々當分及差間候へ共取込の黃紙切手返納の繰卷不相成御扶持方
成の儀得不申出者も有之由相聞候右體の面々只 持越及差間候者有之に付而及
暮歎の筋不絶御捌も難相成儀に候へは御仕法も有之儀に候へ共重々御惠の筋を
以當七月中迄の儀は今年計各別の御了簡にて黃紙不及返納御扶持方成可被仰付
候間於支配所能々被遂僉議至極差間の面々は御扶持方成の願取次可被申候左候

而至暮當御惱石の内を以差引可被仰付候尤八月よりは前々の通無相違候以上

丑五月

覺

一御家頼中古借米銀年賦調等近年調被差延置候分當暮も調被差延候事

一先年已來去子の暮迄被差出候諸組繰卷銀當暮も調被差延候尤去暮繰卷銀の内

三田尻仕組銀爲替にして大坂被差上せ分御暫借を以貸添相成候依之去る亥の

暮の員數に相増候分は當暮元利調被仰付候事

一先年已來去子の暮迄寄組已上其外對御役組内借にして至暮貸渡被仰付候條當

暮調被差延候事

一去る亥八月大風之節御貸銀當暮元利調被差延候事

一去る亥暮高百石に付三石宛之御貸米同斷

一去る亥子兩年被差出候御貸米之内去暮調被差延置候分同斷

一當年被差出候御貸米之儀當暮調に被仰付候事

右此度就御仕組御家來中諸借納方前書之通被仰付候事

丑五月

六日當職益田河内ニ黒印令條ヲ授ク略

八日山縣市左衛門手元役ヲ免ス

九日公萩城發駕

六月朔日四日八日十四日二十五日及七月十四日大雨洪水國內所在氾濫菽地七月十

四日ヲ尤暴烈トス川島橋本邊ノ堤頭水ノ溢越スル高一尺五六寸ニ至ル市街ノ人家

皆水中ニ在リ本年國內田圃損害高十四萬二千七十石餘家屋倒覆大小二千八百五十

七軒神社十三宇橋流失百二十九人死二百二十六名牛馬死四十八頭古今之大災ナリ

十二日林八郎右衛門ニ粟屋權兵衛後任大坂檢使役ヲ命ス

同日公著府途次富士川滿水ニヨリ一日遲着

十三日公月次出仕乞願許可アリ

廿六日加判役宍戸出雲乘輿乞願許可アリ

廿七日諸國宿驛ニ令シテ盜賊及火賊を追捕セシム令文略大目付同狀

七月三日老臣訓示左ノ如シ

覺

掃部頭雅樂頭と申兩名は天下執事職之御名付而御家來中え掃部雅樂と申名をは

被差免間敷段御先代にも御沙汰有之候彌向後掃部雅樂と申名をは不被差免候條

たとひ下より願出候共取次不仕様に遠近方え此度御沙汰相成候御直書所にも右

の趣記置下より願出有之候共差押可被申候尤當時酒井様の御名えあたり相候て

之御沙汰にては無之候右之通天下執事職の御名に付御家來中よりの願被差留儀

候條此趣能々御直書所え記置可被申候事

延享二年丑七月三日

七日將軍今年六十二在職三十年世子既ニ年長スルヲ以テ近キ内ニ讓職アルヘキ旨

内命ヲ傳フ

廿二日高家長澤壹岐守資親ヲシテ之ヲ天朝ニ請フ

十七日邸地坪付提出ニ關シ大目付同狀左ノ如シ

屋敷改に有之候帳面の坪數古帳に成相違成も有之候付爲書改置候依之萬石以上
且老中支配の面々居屋敷中屋敷下屋敷所付並坪數等委細書付指出候様相違取集
候而可被差出候尤頭支配有之面々は頭々支配々々より取集差出させ可被出候

七月

廿三日記録所役上山庄左衛門齡七十三ニ達シ辭職ヲ許シ白銀十枚下付公儀人三浦
與右衛門ニ勘定宛役ヲ手回物頭小川貞右衛門ニ公儀人ヲ命ヌ
八月九日生田八郎右衛門ニ大坂檢使ヲ命ヌ
十六日邸地坪付提出左ノ如シ

覺

- 拜領
一上屋敷 一萬三百四十一坪半
- 同
一中屋敷 千六百三十三坪
- 同
一下屋敷 三萬五千八十坪

- 年貢地 千駄谷村
一抱屋敷 一萬八千三百坪日本橋迄二里餘
- 無年貢地 赤坂今井谷
一家來屋敷地 三千五百坪餘日本橋迄壹里十五丁程

但松平大膳大夫家來吉川左京屋舖

右之通相違無御座候此外抱屋敷家來之者迄所持のもの無御座候以上

松平大膳大夫内

八月十六日

兒玉市之助

廿一日ヨリ二十二日ニ至ル養心夫人七回忌青松寺ニ於テ修セラル銀十五枚米十五
俵納付大照院ニ於テ法會執行

廿六日宇田川夫人裏老飯田六兵衛病死ニツキ有福五郎兵衛ニ後任ヲ命ヌ
晦日領國內春來風雨洪水被害之景况幕府へ上陳セラル概略ハ已ニ記載アルヲ以テ
茲ニ略ス

九月朔日三家始登營ノ席ニ於テ將軍隱退世子代立ノ命ヲ傳フ徳川十五代史
十一日兵法場ニ於テ卷藁射手前稽古ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一於御兵法場此度卷藁射手前稽古被仰付候御表先之事に付無益の人集り不申様被仰候然は右之所稽古罷出候面々計罷越可申候急御用にて被爲召候時分居相の程不相知に付罷出候面々銘々名札令持參鏡之間御兵法場入口にて右の札懸所有之候間懸置御兵法場可罷越候引取候時分孰れも右の札銘々取歸可申候事

一御書院溜之間より鏡之間入口之所戸障子之所置候て御兵法場往來之儀は溜之間外椽に半戸のひらき口有之候間右之所計より往來可有之候

一右之外向後諸稽古共於御兵法場被仰付儀も可有之候間諸稽古の節前書之通往來旁同斷に相心得得可申候事

一御座鋪廻り見分の儀は御目付方へ被仰付置筋も可有之候間此段心得居可申候事

一稽古の儀 上にも被遊 御出儀も可有之候間常々稽古場用意の儀も右之心得を以御用意仕置稽古の面々も右之通相心得稽古可有之候事

一稽古依品馬場口辻番所の脇より師匠往來被仰付儀も可有之候間其節は番所へ下横目の者差出置用事に付入込候者の外往來氣を付可申候其節は御陸目付折節罷越見合可有之候尤入込候人柄御用の差別御目付方存知不申事可有之候間相斷罷通候時分名を問控置候而相濟候已後御奥えも相達候様被仰付候事

但御座敷より往來の節も不審の儀有之候は、見届其趣同斷相達候様被仰付候事

延享二丑九月十一日

廿三日兵法場ニ於テ卷藁射手前稽古ニ關シ目付役粟屋五郎兵衛何書ニ對シ老臣指合アリ略

廿五日將軍隱居西城ニ移ル 吉宗右大將家重本城ニ入ル是日ヨリ將軍ヲ大御所様ト唱へ右大將ヲ上様ト大納言家治共ニ三御所様ト唱フ 徳川十五代史

按スルニ公ハモト紀州ノ庶公子ニシテ初メ小邑ノ主タリシカ諸兄皆早世シテ宗家ノ後ヲ承ケテ心ヲ政治ニ用キ文武ヲ勵精シ士民ヲ撫治ス聲績既ニ海内ニ聞へ

タリ正徳ノ末幼君早ク薨シテ軍職ソノ人ナキヲ以テ文昭公ノ遺命ニ依テ入テ宗
統ヲ繼キ職ニ在ルコト三十有一年儉素質朴ヲ以テ自ラ率キ武藝ヲ勵マシ風俗ヲ
正シ下情ヲ通シ壅蔽ヲ開ク上ハ天朝ヲ尊崇シテ大禮ヲ再興シ下ハ諸侯ヲ率勵シ
黎庶ヲ綏寧シテ以テ農業田制ヲ釐革ス又武家ノ典禮ヲ講シ訟獄ヲ恤ミ田獵ニ托
シテ行伍ヲ訓練シ射騎ヲ訓閱シテ武健ノ風ヲ養フ等凡ソ其スル所政治號令皆中
興守成ノ良圖洪獻ニアラサルハナシ以テ後代ノ龜鑑トナシ永ク治世安民ノ表準
ヲ立ツ世ノ傳フル所既ニ明ラカナレハ今多ク之ヲ省略セリ

十月朔日繼統ノ拜賀ヲ受ク元日ニ準ス四日五日亦同シ徳川十五代史

同日公來年歸國ハ向暑ノトキニツキ木曾路旅行ノ乞願認可アリ

十八日本年國內マタ古今ノ稀有火災ニヨリ不得已諸臣ノ俸祿高百石十石懸ノ上ニ
増米十石合テ二十石掛ヲ給與セラル黒印令條老臣添書増馳走米段分左ノ如シ

元來所帶不勝手の上たひく重き臨時の入用差つとひ剩國中風雨水損引續彌差
閏當年も家中より馳走請るの外無之其段最前申聞之處當夏數度の洪水國中の痛

み前代未聞の儀に付兼ての仕組合相違且大坂表の繰巻彌増六ヶ敷忽破れにもお
よふへき趣誠以安危の境各別方便におよはす猶又重く出米申付の外これなしと
いへとも家中の儀も困窮至極の時節此段別而苦勞の事に付衆議を盡すの所に只
今中途の儀 上恐悅の御時節旁江戸表別段の筋無之候然といへとも可成ほと
儀におゐては江戸國元の入用諸事令省略彼是深く儉約の令沙汰の所に過分の不
足價の絶手段乍心外無據半知の馳走申付候條其旨を存し一分々々の儉約を以且
々も家人不離やうに遂奉公におゐては本望たるへし委細年寄共より申聞すへき
者也

延享二年十月十八日 御黒印

覺

御世帶重き御造佐入相續近年御國中風水の損亡度々有之大坂表米紙下直彼是差
湊地道の御取渡御參勤の御入用等令不足御繰巻絶方便御家頼中重き出米被仰付
の外無之候處御思食の旨有之大坂表御國方何れも御借銀高相増候得共持越の工

面諸事御省略旁の御沙汰を以漸御仕組相成御家來中出米去年の通高百石に付十石宛の御馳走當夏被仰出候然處其後御國中數度の洪水古今無之大變田畠當否永否の御所務落且損所井手川除土手取締の夫食道橋修補の御入目下地持の面々御足石飢人御救の料彼是莫大の御入用一ツとして被捨置候儀不相成先達而一應被仰出候御仕組は一向に無形御手遠に罷成於于今は右御償は不及申御國中の人民且々も不及飢様に可被仰付御引當も難相見大坂表御借銀も愈嵩に相成可及破趣に行懸り至極危急の御時節に被相臨寔大切の境此時に候通委細御國より注進の趣被聽召上之別而御氣毒に被思食於江戸も種々御儉約の吟味被仰付候得共御番手半の儀其上此度公儀御祝儀一卷御老中御招請等不被相濟内は御人數減少其外引替目立候程の御仕組難被爲成趣有之に付先御内輪の儀におゐては可被盡御儉約との御事にて上御遣用御部屋方御仕渡共減少の沙汰被仰付御招請相濟候上は早速被是御人數可被差下御沙汰に候其内當分より減少可相成面々は追々にても被差下候様節角御吟味有之事候勿論御國方御入用減少の於吟味は無緩候得共

數年被懸御手候儀故急に深き出目も無之候然は愈大坂表繰卷不相成及破候ては江戸御國共不相濟儀此度の御一事御招請等段々の御造佐入眼前の事候得共其御引當をも被差置水損一通りの償にも乍不行届儀今十石増出米被仰付之外無之候御家來中も數年御馳走打續困窮至極の儀に候得共御國中大變不被任御思慮又々増出米被仰付候段別而御苦勞に被思召何とぞ今少にても軽く御馳走被仰付度旨重疊被仰出候得共右に有之候通各別の絶手段無據御馳走被相増引合半知の出米被仰付候條御家來中被存此旨乍難儀一分々々儉約被盡吟味且々も取續御奉公の覺悟可爲肝要事

附借米銀納方の仕法別紙に有之候事

附愁訴願事彌被差留候事

右被存此旨組支配中えも可被申渡候以上

丑の十一月

益河内
板遠江

山 縫 殿
 益 越 中
 毛 筑 後
 穴 出 雲

増御馳走米段分覺

一高百石以上

但高百石に付現米十石懸

一高七十石以上

但高百石に付現米九石懸

一高五十石以上

但高百石に付現米七石五斗懸

一高四十石以上

但高百石に付現米六石懸

一高三十九石九斗以下

但高百石に付現米四石五斗懸

一足輕以下

但手取現米十石に付四斗懸

一米銀持合之者は勝手次第銀子にて差出候は、和市之儀は二石替御切錢之儀は如古法五石和市被仰付候事

一寺社家御馳走之儀惣之當り之内三步二被召上殘三步一被差除候事

一被石えは出米被差除候事

一二人扶持計の者えは出米被差免候一人扶持にても切方持合二人扶持より上に相候者の儀は出米被仰付候事

一病者幼少御扶持方成の儀先達而十石懸り段分に高百石以上の儀は高百石に付

一石二斗五升宛高百石以下の儀は夫々の段分出米え右の當りを以増出米被仰付候通御沙汰相成候處此度増御馳走就被仰付最前の分は不及沙汰二十石懸り

御馳走出米えすへて五朱増に被仰付候事

一御雇衆隠居料女中の恩扶持先達而十石懸り段分ケ一步引被仰付候通御沙汰相成候へ共此度増御馳走就被仰付最前の分は不及沙汰すへて一步二朱引被仰付候事

右當年御國中風水損に付御損亡大段にて至極御差問に付當夏御馳走出米の御沙汰相成の外此度増御馳走被仰付段分右之通に候以上

丑十一月

十一月二日將軍宣下ノ禮ヲ行フ總テ舊式ノ如シ三日。勅使公卿。五日。辭見ス。

六日水上山眞光院本末帳寺領等録上ノ事幕府ヨリ命令アリ寺領石高九百五十二石餘三百石御宮御供料五百石御代々尊牌料但四ト記載提出セラル

十一日將軍宣下ノ拜賀アリ舊式ノ如シ

同日世木惣兵衛去々年來健脚ノ修業六度群拔ニヨリ金二百匹下付

廿一日扶持方成市川半左衛門在郷住宅ノ姿ニテ萩ニ於テ借宅ヲ構へ數年慢ニ在郷

往來セシハ違法ニツキ逼塞ヲ命ス

十二月二十八日矢島半左衛門ニ世帯方ヲ命ス

三十日諸國巡見使ヲ命ス先例ノ如シ徳川十五代史

閏十二月二十二日貨幣之制發令左ノ如シ大目付同狀

頃日切レ疵金等通用不自由に相成候由畢竟諸國在々諸商人共切疵金嫌ひ國々爲替金等にも疵金等撰候故の事に相聞候前々も被仰出候通自今小判一步判共切レ疵ヘゲ疵大小不構切れはなれ候迄可致通用候輕目金の儀は小判は四厘まで輕分致通用一步判も右分量を以輕分疵金共に無滯可致通用候此旨諸國在々御領私領共に右之段相心得兩替屋を始諸商賣物代金を爲替金等無滯可致通用候若又武家方並町方百姓等不請取者有之は兩替屋より其支配々々え可申出候此已後彼是申致難澁萬一步銀等取候兩替屋有之者其所の支配え早速可訴出候吟味の上急度可申付事

右之趣江戸京大坂は勿論其外御料は御代官私領は領主地頭より急度可申付候以

上

丑閏十二月

廿八日扶持方成内藤左兵衛波多野清左衛門河越庄左衛門三好藤馬林右平治日中他
出セシハ違法ニ因リ逼塞ヲ命ス

延享三年丙寅正月公江戸邸ニ在リ

九日吉川左京參府四月十六日歸邑

十六日閣老本多中務大輔ヨリ吾藩在府の諸臣人員錄上スヘキ通達アリ提出書左ノ
如シ

覺

一惣人數二千百七十一人

内

三百八人

侍

百六十八人

足輕

八百二十人

中間

八百七十五人 又者雜兵共

右於當御地上屋敷下屋敷に差置候番手之人數並定府の者且又母儀部屋會祖母部
屋付者共に相縮書面の通御座候以上

正月

備考

一実戸出雲を始御番手之諸士中並御手細工人足輕以下不殘

一定府之諸士中萩原六兵衛を始御細工人御中間以下不殘

一法林院様長壽院様御付之諸士中並御中間以下

一家業爲稽古罷登御馬乗役者等不殘

一當御番手御中間之中八十人被減之御國被差下候然とも右八十人は例年御本番

手に罷登居候人數の内に付而減少無之沙汰にして八十人をも書加へ且又御番

手中御屋敷内に罷居候仲人五十人をも書加候事

一字田川御裏付心涼院様御部屋付諸士中を始末々迄御屋敷違ひの事に付一切人

積りの内に不入書加不申候事

廿四日財政疲弊諸臣困窮ニヨリ當職益田河内辭職の意思アリ留任ヲ命シ賜メテ根本的整理ノ策ヲ講セシメントス因テ目付役粟屋五郎兵衛ニ歸國ヲ命シ益田河内へ御書御意書左ノ如シ御加判毛利筑後益田越中山内縫殿スハ御書御意書アリ粗同文ヲ以テ略ス

一筆申遣候兼而勝手差詰之上去夏國中數度之洪水古今無之大變且大坂表至極之差問彼是各別之絶方便去年家來中より増出米申付之處猶段々重き入用差湊家中之儀も困窮至極最大切之時節至り我等苦勞此時に候依之存念之趣申合一人差下候此度之儀不尋常事に候條無用捨盡思慮萬端縫殿申談尤筑後越中申合上下相調候様根え入候仕組急度可有吟味候且又其方役儀理申出度内存之趣をも聞届候得共此時節幾重相断候ても只今差替候様絶而不相成事候條氣分をも取締無遠慮仕組調置可申候左候は、歸國早速聞届之上何分にも其沙汰可申付候猶委細之儀年寄共より可申候也

正月廿四日

御判

益田河内とのへ

御意之旨覺

益田河内

右被成御意候殿様益御機嫌能其外上々様方御勇健被成御座候御國中相替儀無之由追々被聞召上之候然は兼而御不勝手地道御不足過分之上去夏數度之洪水其費莫太之儀且大坂表之繰卷必至と差問各別之被絶方便去冬御家來中より半知之出米被仰付候へ共猶御不足嵩之上當年御老中御招請を始巡見使一卷旁重き御入用差湊大坂之儀も御借銀彌増に相成工面難相調既破連之期にも至候程之儀其上御家來中困窮至極之事に候へは彌以且々も取續遂御奉公候様被仰付候はて難叶儀至而御苦勞被思召候年來御不勝手故度々御仕組之吟味有之候へ共御家來中より之御馳走其外を以漸其年之御入用相調候而已にて根之御借銀大概繰延借替猶御新借も有之に付自他國之御借銀年々に相増御家來中之儀も彌一統之差詰に罷成誠以上下危急之時節に臨候然は當年より之御仕組尋常之儀にては不相濟事候少

々御儉約等之儀は只今迄御吟味被盡たる事に候へは此外之儀におゐては容易に可相調筋無之候間諸事流例格式に不拘上之御身分懸り候儀にても被相改可然儀は少も無遠慮申上之次御家來中大小身共に舊格風俗相改宜筋をは委敷遂僉議いつれの道にも上之御所帶御取續御家來中且々も遂御奉公候様根え入候御仕組可致吟味候尤右御仕組之儀凡如何様之趣に相調候様にと只今被仰付之品も無之候條先規に不及如何體にも存寄之所聊無用捨御仕組調候様にと被思召候尤大坂表え懸り相候儀多く可有之候間井上源三郎は不及申上田父子鴻池など御國呼下相談仕度儀には江戸へ不及申越御留守之中召下し打合御仕組取立可申候萬一上田鴻池など御國罷下候儀不相成大坂え之相談差問候は、手元其外用方役人之内彼は大坂差登候而成共熟談可被申付候當分之儀にても無之先懸大切之御仕組猶又急に難調段勿論に候條御歸國之上仕組之趣與得被聞召上之御好之筋於有之は其譯能々僉議被仰付いつれ之道にも可被遊御決定候間其内御仕組一通り之儀差急可相調置候且又肝要之御時節萬端不及思慮御役御斷可申出内存之趣遠江迄申

越候筋をも被聞召上之無餘儀事に被思召候然共幾度相斷候ても只今被差替候様には不被爲成候時節柄別而苦勞之事に候へ共氣分取繕はまり候而相勤縫殿前方之様子をも存知功者之事候條諸事申談尤何篤筑後越中申合候様にと被思召候爲旁栗屋五郎兵衛被差下候付此者へ被仰合猶御書にも被仰遣との御事

同日前美稱代官神保市郎右衛門ニ前大津代官ヲ佐村長右衛門ニ前美稱代官ヲ命ヌ廿五日遊行上人來萩常念寺滯泊二月十六日發程草舎年表

二月十一日去年古來稀有ノ水害ニヨリ國計益迫ル諸臣ニ半知ノ出米ヲ徴セラレ年未困頓悲境ニ陥ルヲ以テ目付役林小左衛門報告ノ爲メ出府セシム小左衛門長文ヲ以テ三月二十一日小左衛門ニ歸國ヲ命シ當役中へ御意書左ノ如シ毛利筑後益田略

山内縫殿
益田河内

右被成御意候殿様益御機嫌能被成御座其外上々様方彌御安全被成御座候間心安可存候將又御所帶至極御差問之上御家來中一統之困窮地方之儀も別而差詰百姓

撫育彼是不容易誠以大切之時節に付去暮以來之趣林小左衛門へ申合差登具被聞
召上之猶演説をも被聞召上別而御苦勞に被思召候然とも去秋已來上恐悦之御時
節に移り江戸表御並方之御格式も有之其上御招請等差掛り引替候御儉約難被仰
付候御招請後控相濟候已後は萬端省略之僉議可被仰付候差向當年より之御仕組
大切之事に付而先達而粟屋五郎兵衛被差下被仰付候趣彌其旨相心得隨分申談無
緩致吟味追々大坂御借銀御納込も相成候様深く根へ入候御仕組調置可申候御家
來中之儀も銘々不勝手至極之事候へ共御差問之御時節令勘辨何とそ一分々々之
盡吟味且々にも取續愈謹而御待請仕候様寄々可有沙汰候肝要之時節各心遣之儀
に被思召候小左衛門被差下候付被成御意候との御事

廿一日閣老公儀人ヲ招キ歳暮ノ内書ヲ授ク公儀人へ賜物例ノ如シ

廿二日公登營三御所へ拜謝セラル將軍繼統始テノ内書タルニ因テ也

廿三日法林夫人裏老小川源右衛門辭職留任長期勤勞ニ因リ金二十兩下付

廿六日柳澤新右衛門ニ城代役ヲ佐竹善左衛門ニ大組物頭ヲ志賀平馬ニ當島代官ヲ

戸田又右衛門ニ吉田代官ヲ命ス

廿八日一條關白大相國宣下ニヨリ使ヲシテ銀三十枚ヲ遣リ祝セラル

卅日江戸大火築地ヨリ失火淺草本所ニ及フ

三月廿一日武家諸法度ヲ頒ツコト先代ノ如シ文亦享保ノ初
異ナラス

廿七日訴訟之制發令左ノ如シ大目付同狀

覺

一借金銀賣掛け等之出入は人々相對之事故近來一ヶ年兩度之裁許に申付候得共
向後三年以前子の正月よりの金銀出入前々之通取上げ裁許可申付候四年以前
亥十二月迄之金銀出入は只今迄奉行所にては不申付候間一ヶ年兩度之裁許に
日切等申付候分共向後奉行所にては不申付候間相對を以無滯急度可相濟候
一只今迄金銀出入に付奉行所より呼出し候節令不參又は濟方申付候得共金子不
差出輩有之由相聞え不埒に候右之通此度相改り候上奉行所より呼出し候節致
不參候か又は濟方申付候ても不埒之輩有之は武士方は奉行所より老中え申達

候管候寺社在町方は奉行所にて急度答可申付候
右之趣可被相觸候

寅三月

廿八日及四月二日閣老其他衆賓ヲ招キ饗應セラルル將軍ノ宣下ヲ賀スルナリ

同日萩河添本町大火

四月三日大組頭堅田内記ニ江戸留守居ヲ命ス

四日ヨリ五日ニ至ル季光公五百回忌洞春寺ニ於テ法會修セラルル米十俵銀十枚納付

季光公廣元公第四子始テ毛利ヲ稱ス

十一日ヨリ十二日ニ至ル隆景公百五十回忌泰雲寺ニ於テ取越法會修セラルル銀十枚

米十俵納付泰雲寺住持へ時服一下付隆景公元就公第三子出テ小早川家ヲ繼ク

十五日江戸留守居堅田内記若老中ニ任ス是時安房ト改名ス安房在江戸人張上下十

九人ト定メラル

十六日家重將軍初テ閣老本多中務大輔ヲ使トシ歸國暇ヲ賜フ賜物如例大納言家治ヨリ

西尾隠岐守ヲ以テ縮緬十卷前將軍大御所ヨリ紗綾十卷ヲ賜フ十八日公登營拜謝馬ヲ賜フ

同日江戸留守居堅田安房宇田川夫人裏老福原五郎兵衛ニ黒印令條ヲ授ク

廿一日公江戸發駕

廿五日萩城第二郭石垣十二所孕出修理ノ事幕府へ請願許可アリ

五月六日扶持方成桂一格兼常源太郎杉山與右衛門法規ヲ確守シ行蹟良好ニ因リ褒詞アリ

廿一日當役板本遠江陪從中病ニ罹リ高森ヨリ公ニ先チ萩ニ歸リ是夜死去當役ノ用務當分手回頭完道式部乃美仁左衛門ヲシテ勤務セシム

廿三日公歸城歸國禮使浦主計タリ

廿四日公歸城以後歩行初宮崎八幡ニ詣セラルル社司吉屋若狹守宅ニ臨ム

同日幕府巡見使小幡又十郎板橋民部伊奈兵庫是日石見國ヨリ阿武郡徳佐村ニ入り

國內順次通行六月十日藝州佐伯郡ニ移ル享待如例今同巡見使錦帶橋ヲ見ニト欲シ

國內順次通行六月十日藝州佐伯郡ニ移ル享待如例今同巡見使錦帶橋ヲ見ニト欲シ

經過

六月朔日熊帶刀ニ當役ヲ命ス

三日大目付回狀左ノ如シ

召連候供廻り之者共不禮無之様に度々被仰出候處近來不禮之聞え有之候其上老中若年寄中えも不禮成も有之様相聞如何候向後彌相慎作法宜様に可有之候尤無禮之仕方有之におゐては家來は不及申主人之越度たるへく候條此旨可被相守候右之趣可被相觸候

寅六月

十七日上田八郎右衛門ニ當役筆者ヲ命ス

十八日宮原宗句辭職數十年後房勤勞ニヨリ金十兩下付

七月十六日大組物頭兼重新右衛門手回組ニ加へ目付役ヲ命ス櫻井市之介ニ赤間關

唐船打拂根知兼役ヲ命ス

十八月緒方久右衛門心亂妻及嫡子左中ヲ殺害シ久右衛門自殺ニヨリ家祿高三百石

沒收

延享四年正月十二日久右衛門三男緒方留槌特別ヲ以テ家祿高五十石更ニ給與大組ニ加フ

十九日無給通吉田九郎右衛門紋章ノ上下着用ニヨリ尋問ナリシニ曾祖父九右衛門秀就公ヨリ下付アリタル旨陳述セリ紋章ノ恰好秀就公時代ノ紋形ニ非ス因テ逼塞ヲ命シ上下沒收紋章切抜キ大納戸へ交付セラレ

廿三日公當役中ヲ召シ江戸當役ヲシテ讀知セシムル令文左ノ如シ

家頼中數年馳走之出米打續一統困窮至極於于今は花美の儀無之風流物數寄等好み候儀も自然と相止候時節といへとも間々不心得の者は風俗不宜表向は質素儉約を用ひし形にて内證は道理に不叶或は假初の參會之節も種々準へ事をいたし無益の費を不厭勝手彌増令困窮肝要諸士の可嗜儀は怠り心得不宜者有之様相聞へ候此等の儀書付等差出候でも尋常にては改り候様に有之間敷候然は當役中は勿論非役の一門老中は家中の筆頭にも立候身柄候へは能々申談令一和衣類其外

器物等に至迄無内外遂吟味相愼候は、自然と其風俗を見習ひ學ひ候様に可有之儀左候時は家中末々迄敷へ戒にも相成おのつから風俗の直りにも可相成儀候
廿四日本年諸臣祿高百石十二石掛リヲ給與シ明年及明後年ハ百石十一石掛リヲ給セラルヘシ依テ黒印令條老臣添書旅役出米並馳走出米段分左ノ如シ

數年所帶不勝手の上去年の洪水國中の費夥敷家來中より半知の出米等を以差向入用の不足一先償之吟味有之といへとも元來大坂表の借銀過分の儀に付くり卷の絶方便既に破れの期にのそみ其外臨時の造佐入も有之彼是至極の差間此上の仕組尋常にては難相濟且家來中よりの出米相止候時節も不相見還而扶助難屈やうにも可罷成哉誠に上下大切の境に付急度舊例格式を改根え入候仕組申付江戸外向え懸り候儀は格別其外におゐては諸事の儀深く省略減少の令沙汰當年より六ヶ年の間重く儉約の吟味申付之處に猶餘分の不足有之仕組難調無據先當年より三ヶ年の間家來中より別紙の通馳走請るの外これなし銘々困窮至極の時節引續出米申付此段至而心外の儀ながら各別の不逮手段右之通に候條下におゐても

格式流例に不拘公私危急の時節を考一分々々の覺悟を以萬端質素を用ひ且々にも取續遂奉公におゐては祝着たるへし委細年寄共より申聞すへき者なり

延享三年七月二十四日 御黒印

覺

御所帶數年の御不勝手米紙の價不宜連年風水の損亡相續利根川御手傳去夏の水損古今無之大變にて田畠當否永否夥敷右一事御造佐入餘分の儀殊更去秋の作物不熟にて御所務取立不相成其上御招請御巡見使彼是御入用過分の儀大坂表御借銀近年相増繰卷六ヶ敷既に去暮は可及破趣に相成寔御所帶危急に被臨候御家來中の儀も數年の御馳走去秋は水損の變に依而無據御馳走被相増勝手差詰候段被聞召上彼是深く御苦勞被思召候近年追々御仕組被仰出候へ共一ヶ年切之御仕組に付御借銀大概繰延借替等の工面且年來風水の損亡出來に付御仕組も猶又積り令相違去年以來不意の大變彼是の趣を以御國御借銀も漸々相増候依之此度御思召の旨有之流例舊格をも相改不拘先規上御所帶並御家來中も且々取續候様根に

入候御仕組仕上之御身分に懸り候儀も被相改宜敷筋は無遠慮申上御仕組成立候吟味可仕旨當役中え段々被仰出遂僉議候處年來御儉約にて上御遣用被減候へ共右御減少の趣を以も近年之通自他國御遣用を被相立候へは御藏人米銀令不足千四百貫目餘御借銀を以御通り被成候御積り候へ共此度重御儉約の御吟味を以御納戸御入用上々様方御配分江戸御參勤並御國御遣用諸役人役料其外被下米銀等の廉々巨細を不殘一々僉議被仰付殿様其外上々様方御不自由被遊御堪忍の外無之儀に付餘分減少被仰付諸役人中其外被下米銀等大概半分又は不殘御引せ被成候程の減少被仰付候ても漸千三四百貫目餘に相成且々御藏入有物御摺合せの御積りに相成候へ共自他御借銀元二萬貫目餘の利銀二千貫目餘一向御引當無之候右利上等不被仰付候ては利銀相増四五年を経候ては三萬貫目及に可相成段眼前之儀に付而格別被成方無之自他御借銀利下年賦等の儀を始其外種々工面被仰付御家來中出米をも被取合且々御積相成候御家來中も近年御馳走相續候へは何とそ重御儉約の出目を以御家頼御馳走米をは被差除旅役米計の出米被仰付度御思

召有之當役中段々遂僉議數月役人中えも吟味被仰付候へ共右之通別段被成方無之不得止漸重き御馳走の處を被減當寅年より旅役米の外六石宛出米被仰付候間御所帶御安危の境存此旨御奉公の筋無忘却乍難儀被遂御馳走候様にと被思召候條面々御儉約年限の内は御扶持方同前の居形を以可被遂御奉公候事

一此度之儀御思召之通根に入候御仕組相調候趣向種々盡衆議遂僉議候へ共素御借銀嵩の儀此上各別の被絶方便出米をも被仰付候而漸御借銀増不申様に相成御借銀減少の期差當り不相見申上候處別而御苦勞に被思召候然共年を重御儉約も相立且御米紙直段も宜相成候は、右體の御積り自然と出來の期も可有之哉と申上置候事

一此度御僉議之上御儉約間は公邊並御並方御格相等の儀は格別御内輪の儀は殿様御居形御省略凡御石高半減程に諸事可被遊との御事候間御家來中の儀も銘々分限高凡半分程の居形に被仕候而諸事省略可有之事

一御儉約年限當寅の年より先六ヶ年と被相定候條此趣を以銘々引詰候儉約の可

有心得候事

一御家來中内借捌方之儀別紙仕法書之通被仰付候事

一御儉約内御扶持方成同前に被相心得流例舊格又は同列々々の並に不拘一分々々諸事引易候吟味仕備人張等に至迄銘々の吟味を以被致省略且々も遂御奉公候心得肝要の儀に候若同列の内舊格流例等申立一分々々の儉約を妨候族於有之は一廉曲事に可被仰付候事

一此度段々僉議被仰付御家來中公借の分別紙の通被捨下内借年延調の仕法をも被仰出嚴敷被立御儉約御馳走米の員數も三ヶ年分被相定候へは御積りも切積の儀聊臨時の御餘計無之尤年々御貸米銀御救の廉別紙之通被仰出候間右の積りを以面々手取石にて足不足摺合せ可被罷暮候若不意の變によつて無據造佐入有之御奉公不相成面々は御手届不申儀候間御仕法の通御扶持方成可被申出候此度先達而被仰聞候外一統の御救は及不申一切勝手取續の歎不被及御沙汰候此旨支配々々の頭人能々可被得相心得候若相背根に申出候族有之は可被相答候事

一御儉約六ヶ年の内は愁訴断の儀は勿論惣而御歎ヶ間敷儀流例舊格をも不被相用候條御家來中其心得を以一切御歎筋の儀断被申出間敷候事

附寺社家官職並諸藝者稽古傳授等付而江戸其外え罷越候儀一向自力は各別纒にても御世話に罷成候儀は堅不被仰付候事

但自力にて罷越候ても追々師家其外え禮物入候儀たとひ如何様之先格有之候ても御世話之儀は一切不被仰付候尤寺社家官職其外之儀も何え御用有之無據上より被仰付有之儀は各別之事

一新作事一切被差留候若無據儀於有之は遂内意候上断可被申出候事
右大小之御家來中前條之廉々能々可被相心得旨候以上

寅七月

益 河 内
熊 帶 刀
山 縫 殿
益 越 中

毛 筑 後
穴 出 雲

旅役出米並御馳走出米段分

一高百石以上

但旅役出米高百石に付五石宛御馳走出米高百石に付七石宛以上十二石懸り

一同七十石以上

但旅役出米御馳走出米共に高百石に付十石八斗懸り

一同五十石以上

但同斷高百石に付九石懸り

一同四十石以上

但同斷高百石に付七石二斗懸り

一同三十九石九斗九升已下

但同斷高百石に付五石四斗懸り

一足輕以下

但現米十石に付四斗八升懸り

一病者幼少並御扶持方成之儀高百石以上之儀は高百石に付一石二斗五升宛高百石以下之儀は夫々の段分辻出米へ右之當りを以増出米被仰付候事

一米銀持合之者は勝手次第銀子にて差出候は、和市の儀は二石替御切錢取の儀は如古法五石和市に被仰付候事

一被石えは出米被差免候事

一寺社家之儀は惣の當りの内三步二被召上殘三步一被差除候事

一二人扶持計の者へは出米被差免一人扶持にても切米持合二人扶持より上に相候者の儀は出米被仰付候事

一御雇衆隠居料女中の恩扶持一步引にして被遣候事

右當寅年分御家來中旅役出米並御馳走出米共段分ヶ右之通に候事

卯辰兩年旅役出米並御馳走出米段分

一高百石以上

但旅役出米高百石に付五石宛御馳走米高百石に付六石宛已上十一石懸り

一同七十石以上

但旅役出米御馳走出米共に高百石に付九石九斗懸り

一同五十石以上

但同斷高百石に付八石二斗五升懸り

一同四十石以上

但同斷高百石に付六石六斗懸り

一同三十九石九斗九升以下

但同斷高百石に付四石九斗五升懸り

一足輕以下

但現米十石に付四斗四升懸り

一病者幼少並御扶持成の儀高百石以上の儀は高百石に付一石二斗五升宛高百石

以下の儀は夫々段分辻出米へ右の當りを以増出米被仰付候事

一米銀持合の者は勝手次第銀子にて差出候は、和市の儀は二石替御切錢取の儀は如古法五石和市被仰付候事

一被石えは出米被差免候事

一寺社家の儀は惣の當り之内三步二被召上残り三步一被差除候事

一二人扶持計の者えは出米被差免一人扶持にても切米持合二人扶持より上に相候者の儀は出米被仰付候事

一御雇衆隠居料女中の恩扶持一步引にして被遣候事

右卯辰兩年御家來中旅役出米並御馳走出米共段分右之通に候以上

寅七月

同日儉政中毎月式日三度ノ登城ノ例ナルモ二十八日登城ヲ免シ朔日計登城公歸城ノ月並極月正月ハ二十八日登城スヘント令セララル

同日明倫館目安箱ヲ置ク本門ノ前左ニアリ草舎年表ニ

書付に身ふんのみやうし名かき付さし出可申候事

年月日年々御改

廿五日公目付中ヲ召シ當役中手回兩頭直目付列座江戸當役讀知令文左ノ如シ

一大小身共に家作普請身上不相應に種々物數寄分過の仕形も有之様に相聞内證
衰微の基甚不宜風俗に候事

附世具等古來より結構に相成振舞一途の器物丁寧に花美の風俗に罷成不心得の儀候事

一諸役人毎々寄合の參會有之料理菜數極有之といへとも品宜儀も有之様相聞候
此御時節不相應の心得に候間氣を付可有見分候事

附役入番入等の振廻兼而被差留候得共毎々結構の取持花美風俗相成依之過
分の造佐入有之御役被仰渡候ても第一此料に差問御役難相續様に有之由
甚不宜心得に候急度見分候て可被致言上候事

一外向は御法を守諸事繕ひ候得共内居の身持行跡不宜或は妻子稽古に準へ自身

に種々遊興を專に取あつかい本意を失ふ族有之様相聞甚以不宜儀候事

附御役相勤候内にも右體の身持有之由相聞候能々見分候て可有言上候事

附内外共に御法能守身持宜ものは是又見分の趣可被申出候事

一君邊相勤候面々外様の者親く交り不心得の者有之由相聞候事

一大小身共男女の衣服品定有之身上相應の心得可有之處に間々物紛れたるも有
之様相聞候間能々可有見分候事

一御扶持方成の儀は兼而御仕方有之候處毎々山河の獵或は夜中の他出相成儘に
終夜致他行遊興に拘り又は滞留等いたし平人同前の身持甚不心得の儀候急度
令見分可被申出候事

一家業有之者其業に怠り或は他業を學ひいたつらに暮し候ものも有之由相聞候
見分候て趣可被申出候事

附家業にて無之者弟子數多取指南いたし諸人の重寶相成者は是又可有言上
候事

一明倫館諸稽古並諸師匠の宿々にての稽古怠り有之様に相聞候不絶令見分可被
申出候事

附抽諸人稽古精出者有之候は、是又可被申出候事

右之通此度御心持有之被仰付候條能々令見分委細逐々可有言上候數年御馳走打
續困窮至極行詰候時節に相成質素儉約を相用ひ且々取續御奉公可申上時節に臨
内證には種々無益の費をいたし儉約の實儀に不叶終に御扶持方等罷成偏御奉公
の本意を失ひ候段甚以不心得の儀候右之條々は當役非役の御一門老中を始寄組
以下末々の者迄も依怙無私能々見分候て逐一可有言上候已上

同日出羽次郎左衛門深野三郎兵衛手回組ニ加へ目付役ヲ命ス

八月朔日萩城内用杖ニ關シ訓令左ノ如シ

覺

御城内にて杖突候儀自今一切被差留候事

但只今迄袋入の杖持せ來候面々たりとも向後は御城内えは杖もたせ候儀可

爲無用事

附作事方役人其外役筋によつて杖突來候分は各別の事

以上

六日重見平馬父伊右衛門心亂始末中逃走セリ親族ヨリ嫡子平馬ニ相續ノ請願アリ
先格ニ因リ伊右衛門持掛高九十四石四斗之内一割八歩ノ當リヲ以テ十六石九斗九
升二合ヲ減シ殘七十七石四斗八合平馬へ給與家督ヲ命ス

七日公明倫館ニ至リ手回頭ヲシテ讀知セシム訓示左ノ如シ

館中文學を始め諸稽古無懈怠様にとの御思召故毎々其段被仰聽置候然處今度公
私共重き御儉約の儀に候得は自然と諸稽古に怠り申様に有之候ては甚以御思召
に不相叶事に候文學之儀は人倫本を移る忠孝第一之教へに候武藝其外諸稽古等
皆爲可遂御奉公諸士可相嗜事勿論の儀なからケ様時節何角令食著年月後れ肝要
稽古の年比も過候では及後悔候も不相成事に候此時節柄の儀に候間諸事の儀は
質素令儉約諸稽古の志しをは何とぞ勵し衣服等見苦敷分は却而思召に可相叶候

間銘々不願分際餘勢を差除危服を着し不拘他見爲自分諸稽古有之候へかしと被
思召候此明倫館御先代賢慮を以被建置候段非別儀依教化の徳諸士の風俗正敷實
儀にも叶ひ候様にとの御思召の旨に候得は今更御遺念を被爲繼御苦勞に思召候
經書等講讀の節猶以心持も可有之儀との旨に候今日不圖被遊御立寄候に付御思
召の旨被成御意候との御事
御意之趣右之通に候以上

八月

宍道式部

乃美仁左衛門

九日後十日重就公第二子惟保君初千代子長府ニ生ル

母家女利尾
後練心院

十三日春來風雨洪水數度は日萩地附近殊ニ暴烈國內田圃ノ損害高十三萬五千三十
石餘家屋倒覆大小凡三千六百七十計寺社百五十六宇破船四十二艘人死十六名負傷
八人牛馬死三頭ナリ

十五日飯田平次兵衛ニ記録所役ヲ命ス

十六日公儀人井上半右衛門死去

廿日城内用杖ニ關シ訓令左ノ如シ

御城内杖つき候儀持せ候儀共に一切被差留候段最前御沙汰相成候へ共六十歳以
上の老人は向後御城内杖被差免候事

廿一日當役熊谷帶刀加判山内縫殿辭職留任ヲ命ス

同日神村藤左衛門扶持方成中熊野五郎兵衛娘ト許可ヲ經ス結婚セシハ違法ニヨリ
隠居ヲ命シ祿高ノ内三十石減少殘高四百七十石假養子南木工二男小内へ給與五郎
兵衛娘ハ離縁ヲ命ス熊野五郎兵衛逼塞ノ後隠居ヲ命シ嫡子左太夫ニ家續セシム
同日射手前遠的公覽ノトキ好成績ニヨリ氏家十右衛門外八人へ各三百匹下付

廿三日諸藝年齢ニ關セス修業スヘキ内訓左ノ如シ

諸藝師並弟子中の所作被遊上覽候處年齢に罷成功者の弟子中は不罷出年若にて
當時稽古執行の者計罷出候様に相見候年若にて稽古不怠精を出し候者共差出候
段は左様有之へき儀尤の事候然共功者弟子年齢長ケ候ては年若の者へ交り罷出

かたきやうに共心得候歟又は御役等相務身柄にては罷出候儀差控候様に有之候
ては心得違ひの儀甚非本意候地道稽古の節も年齢功者の者共不絶罷出師匠申談
候時は未熟の者執行の便にも相成且上覧の節も功者のもの相交罷出候へは猶以
所作も物深く有之儀候條自今師匠々々の心得は不能申弟子中功者の面々も彌以
御役又は年齢に不拘修練無怠相勵候段勿論たるへき事

右能々内意申聞せ候様にとの御事

廿六日益田越中大頭役ヲ清水長左衛門ニ越中代リ若年寄ヲ命ス井原孫左衛門梨羽
頼母ニ八組頭ヲ命ス益田隼人八組頭ヲ免シ羽織下付

九月朔日山縣重藏騎射公覽アリ好成绩ニヨリ金一兩山田半三郎諏訪太郎左衛門金
三百匹下付

三日町奉行島尾五郎左衛門ニ公儀人ヲ三田尻頭人中川與右衛門ヲ町奉行ニ乃美權
右衛門ニ三田尻頭人ヲ目付役粟屋五郎兵衛ニ大坂留守居役ヲ檜崎吉右衛門藏元兩
人役ヲ免シ銀十枚下付熊谷彦右衛門ニ藏元兩人役ヲ木梨彌右衛門ニ京都留守居ヲ

命ス

五日杉慶甫嫡子雇ニテ數十年陣僧勤務ニヨリ金三兩下付

八日陣僧松村林古土田慶祖世良立祖江戸ニ於テ公用切手ヲ竊取シ夜中品川宿微行
セシニヨリ審問ノ結果三人共給米沒收歸國ヲ命シ野山屋敷へ入牢ノ後遠島ニ處ス

十二日大組物頭田坂傳右衛門手回組ニ加へ目付役ヲ神村五郎左衛門ニ大組物頭ヲ
物頭山名字右衛門ニ赤間關唐船打拂根知兼役ヲ目付兼重新右衛門赤間關在番ヲ命
ス

十三日洪水損害否起ニ關シ當職伺定左ノ如シ

去年數度の洪水古今無之大變御藏入並給領本知開作共否所夥敷致出來御藏入の
分は新規の仕法を定追々否起之沙汰申付候事

一給領の儀は去年纒宛借米申付候得共端々飢人の救且差向川土手の普請飯米に
相用候得共所に寄り其儀も不行届趣御座候事

一御家來中地道逼迫の上去年は一入重御馳走出米被仰付下地持の面々右水損に

付別而手取の所務少く所帯且々取績候體に御座候然共銘々吟味才覺を以少々宛の所は修補仕由相聞候依人知行十歩一其餘も否所致出來餘分の儀に付夫飯米の絶方便纒の否所にて給主地下共差詰候分は堀戻不得仕候事

一御家來中御馳走出米被仰付候時は惣高え當り遂御馳走候付右否所に所務無之分も無相違手取石の内を以出米仕候付愈勝手差詰に相成候依之只今の通御座候へは田島否起自力に相整候方便年増不相成候事

一百姓之儀も往古より持來候名田又々買得仕分共耕作の營を以家子致渡世相當の諸役を相勤地下石別の御馳走被仰懸候節も給領の儀は惣高え當り候故否石よりも御馳走米差出事御座候然處依水難田島を失ひ耕作の場所減し致迷惑家子分散仕人に寄り抱の田島餘分否に相成候者は百姓軒も減候趣御座候事

一右の否所堀戻の沙汰無之打過候時は所に寄り彌増痛強終には永々堀戻不相成様成行可申候太切の田島の否徒に捨置候様には公私の費不大形儀御座候間急に年限を極め歟下差除百姓共才覺を以自力に堀戻候様申付度存候事

但歟下と申は其年の所務を差除儀御座候事

一開作所の儀は地元折合候迄地位善惡の狂有之物に付一應檢地石盛仕候ても依時節石の上ヶ下ヶ仕儀御座候故三度迄は檢地石盛被仰付候古法御座候事

一古田島の儀は御兩國一統の檢地の外上ヶ下ヶ被仰付候事格不相見候依之作人共精を出し薄地をも熟地に仕立候様に心懸申儀御座候事

一右に付貞享の檢地已後給領銘々不依大小に永否當否致出來候へ共只今迄は自力を以大概之處堀戻山川に相成難及方便分は否石にして給主面々被き仕居候事

一去年洪水の否所夥數銘々勝手にも差詰急に堀戻の方便不相見候條前々の否所に不構去年破損否所の内急に堀戻相成所計給主より相願候は、百姓共相尋請相候上歟下の年限間知行高石下の御仕法被差出可然存候左候は、凡五七ヶ年の間石下にて大概本石高え戻り可申候事

一右之通被遂御許容候時は給主より申出の土地御代官所にて田島の畝石穂木帳

面え向ひ相改否起飯米入用の積等相極め依其員數所務を差除候年數を相定尤其百姓才覺を以堀戻熟地に致し耕作出精を以右の造用相償其餘精力次第作徳に仕候様に申付尤其百姓共え御代官より直に致沙汰其内風水損の不熟有之候共年限相濟次第先石の所務無相違可納段作人得心の上請狀等手堅申付儀御座候事

右前段の趣に付否起不申付時は第一御内檢高減少仕御國中の衰微に相成公儀地下給主三ヶ所の損失御座候古田石下の儀古來より評檢地の外は無之事御座候へ共又去年の洪水大變の儀も只今迄無之に付而全向後の例には可被仰付事にて無御座候左候へは御持方相障筋も有御座間敷哉と存候當春以來石下の願申出候分別紙の通御座候此外にも願出候者少々は可有御座哉夫共多人數にては有之間敷候間旁被成御了簡可然哉と存候尤地下尋入組隙取申儀故追々先地下究をば申付候以上

穴戸出雲

右知行高

一萬千二百十八石二斗六升三合

内

高千七百石餘

石下

國司左近

右知行高

二千石

内

高四百二十九石餘

石下

井原十右衛門

右知行高

八百五石六斗二合

内

高七十一石餘

石下

三廉之石下高

二千二百石

但去年知行所洪水ニ付而本知之内石下之願申出候分石高人數只今迄右之

通御座候事

十四日玉井丑之允父以來數十年乘馬飼養ニヨリ銀二十枚内藤七郎左衛門同上金十

兩小澤市郎左衛門檜崎權兵衛同上各銀三枚下付

十五日清水長左衛門去夏以來公鷹ヲ預リ飼養苦勞ニヨリ銀十枚下付

十六日公深川ノ温泉ニ浴セラレ十月九日還城

十八日毛利讃岐守室卒去是日ヨリ二十日ニ至ル江戸三郎鳴物停止

十月十一日萬石以上ニ判物朱印ヲ賜フ徳川十五代史

十二日新將軍ノ朱印署周防長門兩國領與ノ證書ヲ賜フ公名代毛利甲斐守登營拜受

十一月十一日萩ニ達ス謝恩使益田越中ヲ出府拜謝セシム越中十二月九日登城シ公

ノ謝書ヲ聞老ニ呈ス居數日聞老答書ヲ越中ニ付シ且臺命ヲ以テ越中ニ絹二卷ヲ賜ヘリ

十三日洪水ニツキ本知否所石下ニ關シ當職伺定左ノ如シ

去年洪水に付本知否所出米の分石下の願可被成御了簡の由御座候然共本知の儀

石戻年限も有之候間御帳面高並分限帳高をは減少の不及沙汰被石にて可被差置

候尤右年限間石下の高程は石役被差免候段沙汰可仕候事

一石戻の儀小知の面々は百姓一同に押にして年限の究請合申儀候大知の領分に

て石下ヶ餘分の類は一同の押に難相成候依之年々に所々百石二百石宛其餘も

追々石戻り相成年々戻候ほと石辻宛石役可被仰付候事

十四日扶持方成ニ關シ内訓左ノ如シ

御扶持方成の儀兼々被仰聞候通御奉公差止御家人離候同様にて誠に身上浮沈の

境の儀假初にて可願出筈無之故御仕法最初は御扶持方成一代一度の外は不被仰

付縦代替りにても間合無之候ては不被及御沙汰儀依之下よりも尋常にては不申

出候處年來御馳走等打續御了簡の筋追々有之付而おのつから御扶持方成の願も及數多于今おゐては御扶持方成出入の願輕々敷風俗も不宜罷成候近來は借銀の儀銀主申談御扶持方同前の納方仕候由申出候ても其筋にて一向無之銀主共及迷惑候様相聞借貸通用の妨に相成候者も有之由相聞甚不心得の儀に候此度御仕組付て段々吟味被仰付公借の分は大概被捨下内借の道付をも被仰付候付而向後の儀は御扶持方成一代兩度の外は不被仰付候及兩度候面々は御法の通借銀返濟一ケ年の休仕御役目道具等用意の上組戻可被仰付候尤火災知行所損亡等其外無據非常の儀於有之は能々僉議被仰付候上御了簡を以兩度の外今一度は被仰付儀も可有之候只今迄御扶持方にて居候分は何度目の者にて一度の沙汰に被仰付候組戻り仕居候分は前廉御扶持方成度數は被捨下御扶持方成申出候は、初度の沙汰に可被仰付候且又三度目御扶持方に罷成候者の儀は年限の内家督不被仰出之尤嫡子無之本人婚禮且養子の願申出候ても其内の儀は不被仰出之借銀返辨相濟候上右廉々沙汰可被仰付候此上いか程無據廉有非常の造佐入有之勝手差詰御奉

公難相成猶又御扶持方等不相成候ては取續絶方便候趣に罷成候は、其身隱居被仰付候歟又は逼塞等被仰付にても可有之候間兼而致其覺悟彌取續之可令吟味候事

右御扶持方成の儀只今迄の分捨に被仰付候儀還而度數相増候へ共御思召の旨有之右之通被仰出候條可被得其意候以上

十八日尾寺長左衛門用所役ヲ免シ來年矢倉頭人ヲ右筆羽仁五郎左衛門ヲ免シ用所役ヲ兒玉平馬ニ右筆本役ヲ命ス

同日浦主計領地熊毛郡伊保庄南村之内四十五町三反預リ山請願許可アリ

廿四日參觀賜暇の輩近年木曾旅行ノ情願多シ向後病氣ノ外乞願無用タルヘシト令ス大目付同狀

廿八日裏判粟屋主殿儉政用務ニツキ出府苦勞ニヨリ銀二十枚下付

十一月二十四日役局ニ於テ酒飯饗應ニ關シ内訓左ノ如シ

覺

殿中諸番所諸役所は不及申野相等惣而役場おゐて酒飯且役入番入の振廻停止の段は先年より追々被仰付有之通候諸役人御用談の寄合且又江戸番手等の沙汰有之候ては毎々相集酒飯等差出候流例も有之由相聞候別而重き御儉約の御時節於面々も至極不勝手の砌左様の儀可有之事にて無之候得共彌以御時節を考へ銘々も差詰の事候條一分々々堅く相慎可被申候若不心得の族有之右體の酒飯狼の事於有之は急度可被相答候此段御目付中へ令見分申出候様改而手堅被仰付候條支配々々え能々内意可被申聞候

廿六日及二十七日城中ニ能舞ヲ奏シ老臣以下衆庶ヲ縦觀セシム酒及菓子ヲ賜フ將軍ノ印書拜受ヲ賀セララルナリ

同日小笠原治左衛門印書一件檐當道中守護且巡見使用務苦勞ニヨリ遣吳服一遣單羽織一下付

十二月七日小笠原治左衛門小笠原彌右衛門小笠原治右衛門ニ明倫館集會日ニ關シ訓示左ノ如シ

小笠原治左衛門

右於明倫館小笠原一名中集會日先年被相定置候處右一家の者共館中罷出集會仕趣にて無之に付其譯僉議被仰付候處集會の儀捨置候心得にては無之候得共數年御役に付而近年は不罷出由候就御用相障節は不任心底儀左様も可有之儀候得共たとひ御役懸りにても稱號え對最前被仰聞之筋も有之事に候へは休息時分は罷出一家の者共申合可致集會儀候處近年以無其儀不心得の事候尤嫡子要人儀同名次郎太郎弟子にて稽古仕せ候由愈無懈怠令修練候様に可申聞候向後休息の節は一家の者共申談館中罷出可致集會候且又一名中躰所作の儀至來正月被遊上覽儀も可有之候間其内一名中申談集會は勿論稽古修練等可仕候事

小笠原彌右衛門

右於明倫館小笠原一名中集會日先年被相定置候處右一家の者共館中罷出集會修練仕趣にて無之付而其譯相尋候處近年度々御扶持方にて罷居其上氣分不相勝懈怠仕之由候御扶持方にて明倫館罷出候儀は兼ての御仕法も有之事候へは一名

中集會日館中罷出候段は勿論の儀候處無其儀候小笠原の稱號に對し最前被仰聞の筋も有之事候處令怠慢候段甚不心得の事候向後は父子共集會日無怠館中罷出一名中申談令集會且熱心の者有之候は弟子をも取立可申候尤一名中膳所作の儀至來正月被遊上覽儀も可有之候間其内一家の者共申合集會は勿論稽古修練等可仕候事

小笠原治右衛門

右於明倫館小笠原一名中集會日先年被相定置候處右一家の者共館中罷出集會修練等仕趣にて無之付而其譯僉議被仰付候處近年痛所有之其上内證不勝手付而今以在郷引籠罷在遠路旁にて中絶仕之由候小笠原稱號に對最前被仰聞の筋も有之候處在郷引籠遠路等申立懈怠仕候段不心得の事候向後は集會日無怠慢館中罷出一家の者共申談集會修練等可仕候且一名中膳の所作の儀至來正月被遊上覽儀も可有之候間其内一名中申談集會は勿論稽古修練等可仕候尤嫡子稽古の儀も無懈怠修練仕候様に兼々可申聞候事

十日弓鐵砲家業道具ニ關シ内訓左ノ如シ

弓鐵砲之者常に夫々の家業道具律派に嗜居候段は左様も可有之事に候得共間々美々敷仕立有之候利方宜事に候哉若見懸律派物數寄を好候一通りの事に候は、自今以後目立候模様甚無益の事候間頭々も可有其心得事に候此段能々可有勘辨候事

寅十二月

十二日明倫館習字場ニ關シ内訓左ノ如シ

明倫館手習場近來稽古人少く衰の趣相聞候付其筋相尋候處坪井甚右衛門事兩肩を痛去秋令湯治其後又々大切の種物相煩一人役にて其缺間見合候者無之おのつから稽古人少く相成候由申出候左様の節は功者の弟子の内差出見合等申付館中稽古人衰へに不相成様致方も可有之事候處緩せの儀候向後の儀は随分無怠館中罷出見合稽古人相増候様甚右衛門へ可被申聞候事

寅十二月

二十一日書院役松本孫作三十一年勤務ニツキ銀二十枚下付

晦日寺社家修驗直觸ノモノ共謁見ニ關シ内訓左ノ如シ

在々寺社家山伏直觸の外_ノ者共の御目見各年被仰付候段寛保二年被仰出候右各
年に罷出候者とも、後年引續兩度御目見に不能出者とも_の儀は向後御目見不被
仰付御沙汰候間此段寺社所にて念を入調_虫右體の儀於有之は申出候様にとの

御事

延享三寅十二月晦日

毛利十一代史卷之六十六

大田報助編次

觀光公記九

延享四年丁卯正月公萩城ニ在リ

十一日加判毛利筑後辭職留任馬ヲ賜フ

同日公八組頭桂式部外七名ヲ召シ面命條書左ノ如シ

- 一組頭役之儀は兼而組中之身持行跡等氣を付取計可有之段肝要に候との御事
- 一組中勝手取續之儀而已第一と心得不宜候との御事
- 一數年出米被仰付逼迫之段別而 御苦勞被思召候只今之通にては無際限儀付而
- 近年之内兎角可被返遣御存念に付重き御仕組被仰付候との御事
- 一組中取續之歎河内其外之當役へも内談は左様も可有之候勝手向之儀は輕重有
- 之儀當日及飢候程之者とも計河内へ密に内談之筋可有之儀に候との御事

一上之御差問乍存組中之爲宜一統御歎申出其筋不叶時は一同に御役之理申出或は引籠罷居不心得に候との御事

一組を預り候ては身に引懸可申儀勿論候得共 上之御持方亦是御仕法等之破れ相成儀は組頭共差別を辨へ上下相立やうに吟味可 儀に候との御事

一組中之御歎不同意にても理非をも不論申立候へは折相宜と相心得偏組中之存入を肝要に仕候仕形不本意儀に候との御事

一御家來中諸支配大小身多儀御座候其内遠近付無給以下は至而小身之者候得共強而御歎も無之其外諸支配よりより相歎候へは是又各別之儀無之候との御事

御事

一御家來中取續之願八組中頭取之様に心得前々さ敷寄相等仕與頭へも集り御歎等申出候夫故組頭中も御仕組御仕法之破れも不願 御書付之旨も不相立一統之御救相願甚不心得之至に候との御事

一八組中多人數相催事さわか敷仕候段他之聽へ 御爲も不可然儀は勘辨之外御

座候組頭としては猶以其心得も可有之儀に候處近年は其辨も無之様に相見不
宜仕形に候との御事

一御歎其外共に多人數相催候頭取有之様に相聞候右體之人柄隨分氣を付致言上
候様にとの御事

一當年は御留守之儀御家來中折相旁別而御氣遣御苦勞被思召候於頭中其段相心得隨分申談折合宜令一和組中遂御奉公候様に可相計候此御時節たとひ組中之御歎申出候ても絶而一統之御救は不被仰付候此段相心得於取計は 御安心之
第一に候尤至極差詰當日も難差置者は兼而河内方令熟談取續之可令吟味候暮詰相成さ敷御歎之儀一向申間敷候右之趣承知之段可申上候一統之御救は全不被仰付候との御事

一去暮八組中御歎之筋河内へ内談候得共各別了簡不相成御貸米返納延引之相談にも及候得共是又不相成譯申聞せ候へは頭中自己之落着を以御貸米之押下え相渡甚不心得之至に候との御事

一去々年も右體之作舞有之由於江府被 聞召上候度々之儀甚以不宜候との御事
一舊冬組中不殘御貸米押手取仕候趣とも不相聞候然に勝手向差別も有之事に候
處一統に差免候落着其理無之候との御事

一去冬河内え相對仕候者は挨拶も承たる事に付殘同役中一筋之申方仕共存寄申
聽せ尙河内方相まらへ吟味も可仕所に無其儀無念之至候との御事

右面命書拜承尋テ八組頭中目通停止八組證人呵責左ノ如シ

八組頭中

右御目通差控候様との儀先刻被成 御意候然者伺御機嫌式日登 城御式臺御往
來等之節は一切可被差控候 御城御番其外諸役之儀は常々之通所勤候様に被相
心得候様との御事

八組證人中

八組中内證差岡付而去暮頭中より河内え歎之筋有之候得共兼ても被仰聞置候通
一統御救不相成段申聞せ候依之御貸米上納延引之儀歎有之といへとも是以御切

積之御仕法有之事付而延引不相成段重疊及挨拶候處頭中自己之落着を以御貸米
返納延引之筋にて押差免候由組中至極之差詰當日難差置譯候て押切手指免候は
只今一往河内方へ相しらへ候趣も可有之儀候處無其儀去々年も大體之儀有之度
々頭中不心得之仕方候所帶向之儀は輕重厚薄も有之儀候處其差別も無之一統に
差免候段證人役としては猶更其存寄をも可申儀候處無其儀令同意候段不心得之
至候急度御咎をも可被仰付候得共此度は不及御沙汰候向後念を入候様にとの御
事

十五日山田貞右衛門公狩獵ノトキ弓ニテ野猪ヲ射留タルニヨリ金三百匹下付岡半
左衛門公ニ數年十文字ヲ指南シ傳授完了ニヨリ紋章吳服銀五枚下付岡部半右衛門
公十文字修業ノトキ打太刀ニ出テ苦勞ニヨリ金三百匹下付
十八日公深川温泉ニ浴シ二月三日還城
同日八組頭中へ傳命左ノ如シ

八組頭中

右被成 御意候其方共不心得之趣有之 御目通り差控候様にと被仰聞置候得共
御了簡を以て被指免候此段可申聞旨候事

廿八日月番老中若年寄對客ノ日ヲ定ム非番ノ月ハ毎月兩度舊ノ如シ大目付同狀

廿九日登城ノ大名退出ノトキ玄關前ノ紛擾ヲ戒ム大目付同狀

二月二日諸大名先挾箱ノ制ヲ定ム令文左ノ如シ大目付同狀

先挾箱爲持候儀古來より爲持候分は只今迄之通たるへく候

一古來より先挾箱爲持候得共致中絶近來爲持候面々は向後先挾箱可爲無用候勿

論近來新規に爲持候面々は猶以先挾箱可爲無用候

但古來より先挾箱爲持跡にも箆箱之外に挾箱爲持候面々も是又只今迄之通

たるへく候古來より先挾箱計爲持候處近來跡にも箆箱之外挾箱持せ候分は

向後跡に爲持候挾箱可爲無用候

右之通可被相觸候

卯正月

公參府ノ後四月二十七日幕府へ申告左ノ如シ

覺

松平大膳大夫先挾箱二つ之外に跡にも箆箱之外挾箱一つ常に爲持來候此外何ぞ
廉有之節束帶裝束等にて登城又は上野増上寺え參詣之節は箆箱之外跡挾箱二
つ是又從往古持せ來候右之段御届申上候以上

御名内

兒玉市之助

別紙

松平大膳大夫家來吉川左京先挾箱二つ跡にも箆箱之外に挾箱一つ從往古持せ

來候事

四日先ニ逮捕ノ令アリシ密商日本左衛門一名濱島庄兵衛京ノ町奉行所ニ自首セシ

ヲ以テ搜索ニ及ハサル旨ヲ令ス

五日江戸番手ノ輩ニ對シ儉政ニ關シ戒飭訓示左ノ如シ

一江戸當番手之儀は仕組最初之事に候得は面々之心得肝要に候兼ても申聞せ候

通勝手向至極差詰之事に付尋常にては參勤も不相成大切之期に相臨み候故上遣用次には番手面々えも不得止事諸勘渡等過分に令減少手詰之仕組下以迷惑可仕段令勘辨候然共別段致方も無之右之通に候間銘々之覺悟を以且々も内外之所勤間を合せ候様に可遂其節候事

一此度之儀は前斷之通手詰之仕組故何程不勝手之歎申出候ても仕組年限之内は餘計無之儀故了簡の筋一切不相成事に候然共大小身ともに勘渡之趣を以隨分質朴儉約を用ひ同列之面々令一和一分々々奉公之志を厲し諸事を相慎み差當り候役儀堅固に可相勤事尤に候然處毎々番手之内組頭迄歎の趣有之良もすれは多人數病氣と號し 上之差問をも不顧事共風俗之僻と云ながら譜代之面々俸祿を戴き箇様之儀有之間敷仕形に候江戸屋敷へは他所よりの出入も多く候處外聞等不宜甚不謂儀に候向後かやうの儀可相慎候事

一番手之面々大小身共に孰も人指を以申付候へは勘渡之多少を相考銘々いか様共一番手中は可遂所勤覺悟可有之事に候たとへは軍役之節及逼迫候として供等

之斷可申出哉治亂共に其志は同前之儀に候然共萬一難相務趣も候は、只今急度相斷可申候理り之趣於尤には縦ひ用立人柄にても留守に可指置候番手中途亦は出足前颯々敷歎きかならず申出間敷候
一爰元立前に至て何か歎き又は理り申出候ても一切不及沙汰候
一迎も番手不相成趣に候は、はやく可申出候代りの人から吟味有之事
一右之通斷之品に依て留守に殘置候者大小身共に理之輕重により申付方も可有之候間其節違背有之間敷候

右之條々可申聞事

九日夜外櫻田諏訪因幡守邸ヨリ發火強風大火ニ及フ翌朝ニ至リ消鎮セリ吾藩上中邸近火ニヨリ法林夫人中屋敷ヨリ日ヶ窪ニ火ヲ避ク消防周到ノ爲メ回祿ヲ免ル國元ヨリ法林夫人へ使臣ヲシテ出府候間セシム
十五日萩大照院失火伽藍皆燒亡於是祖宗諸公ノ靈牌ヲ假ニ同村ノ天樹院ニ移ス天樹院本城郭内ニアリ先年火災方今櫻江村ノ地ニ假伽藍ヲ設ケテ天樹院ト號セリ

十七日公諸有司を召し再建の事を議せしむ衆皆曰頻年凶荒國用不足營作の事徐に之を議する可に似たり公曰寺は祖宗神靈の所依據今之を烏有に付す子孫たるもの忽然不爲意可ならんや百方再築の事を議すへしと於是急に土木を起し經營四年にして成を告ぐ

十七日寄組口羽衛士ニ大照院創建奉行ヲ命ス

廿一日兒玉傳兵衛ニ法林夫人裏老役ヲ命ス

廿三日日野勘解由ニ梨羽頼母代八組頭ヲ梨羽頼母ニ桂式部代八組頭ヲ使番張五郎

左衛門ニ目付役ヲ吉村十郎左衛門ニ兒玉傳兵衛代物頭ヲ井上五郎左衛門ニ吉村十

郎左衛門代物頭ヲ東條九郎左衛門ニ宇田川夫人裏老役ヲ命ス

同日山内縫殿三田尻勝間浦ニテ拜受ノ開作地開墾ノ爲メ國術村三間屋ニ於テ百石

後地トシテ交換許可アラハ小郡白杉ニテ高五十石吉田裁判小倉ニテ高五十石上表

スヘキ乞願許可アリ

國術村は往古より奈良東大寺由緒あり右田毛利筑後領もあり交渉の末皆支障な

きを以て允許を與へらる

廿五日長沼九郎左衛門郡奉行ヲ免シ坂九郎左衛門ニ後任ヲ命ス奈古屋九郎左衛門

ニ遠近方ヲ命シ周田孫兵衛ニ代ラシム都野七兵衛ニ鷲頭小左衛門替山口代官ヲ藏

元兩人役山縣藤助ニ京都留守居ヲ長井文左衛門ニ藏元兩人役ヲ命ス宇野與一右衛

門所帶方ヲ免シ大照院創建作事方ヲ命ス

廿八日武藝師及弟子中へ明倫館兩年皆勤ニ對シ各銀二枚下付

廿九日大照院燒失ハ住職ノ過失タルニヨリ徳長老ニ隱居ヲ命ス其他關係ノ寺院退

院家來流刑追放等ノ處罰アリ

晦日松浦茂左衛門ヲ大組ニ加へ山代代官ヲ松村彌兵衛ヲ大組ニ加へ山代檢使ヲ命

ス大照院無住ニヨリ天樹院權西堂大照院兼務ヲ命シ法會ハ天樹院ニ於テ修セラ

ルヘシトナリ

日不詳宗門大究之節萩中之儀惣鎮守ニ付以來春日ノ牛王ニテ相調候ニトノ事沙汰

アリ草舎年表

三月朔日目付役田坂傳右衛門赤間關在番兼役ヲ佐々木五右衛門ヲ手廻組ニ加へ大
檢使ヲ命ス山縣與一兵衛ニ作事方引除檢使ヲ命ス

二日公萩城發駕

八日驛路及廻船之制發令左之如シ大目付回狀

定

一御用にて道中往來之面々御朱印人馬之外添人馬多く相立候由相聞候前々も申
達候通無用之添人馬出させ候儀堅可爲停止候御朱印員數之外に可入人馬之分
は御定之賃錢無相違急度相拂せ可被申候事

一御用に付て往來之面々或は在番或は諸大名惣而道中往還之輩人馬割之役人可
有之事候間御朱印人馬並賃人馬可入ほと相立させ賃人馬之分は賃錢無相違拂
ひ候様に人馬割役之者問屋場に相殘し委細途吟味候様可被申付候其外之家來
又者雇之者共私に人馬駕籠出し候様に申懸候共役人之斷無之候は、一切差出
間敷由宿々問屋場にて相斷候様に可被申付候道中之ものともにも右之通可心

得旨申渡候事

一往來之面々其家來並末々雇之通人足近年は主人之權威を以道中にて非分之仕
方等有之或は下々可持道具をも人足に持せ其ものは馬駕籠に乗或は賃錢をも
不拂もの共有之由相聞候向後は右之類之不届無之様に雇人足は不及申其請負
之もの迄急度申付可召連候自今以後不法之族も於有之は道中宿々にて改之家
來並雇之ものたり共其所に留置早速道中奉行へ相訴候様に申渡候間其旨を可
被存候事

一往來之面々家來並雇之者に到るまで駄賃旅籠錢等無相違相拂候様に急度可被
申付候旅籠錢等或は不相應に減し候て相渡し或は無相違請取候由證文仕らせ
相拂さる輩も有之由相聞候向後右之通之儀共於有之は是又早速道中奉行え可
申訴之由宿々え申渡候間可有其心得事

一諸荷物貫目之儀御定之通無相違様に可被申付候今度荷物貫目相改候場所定り
若御定より重き荷物於有之は御用之荷物之由申候とも繼送るへからさる旨申

付其外宿々え申渡候間其心得可有之且又在番之面々京大坂駿府三度飛脚荷物近年は貫目重くかさ高成荷物有之夜通しも往來候由相聞候飛脚請負之もの其外商人之荷物ましへさる様に堅く可申付尤在番之面々自分之荷物も御定之通を以狼に貫目重き荷物差出さる間敷候古來より夜通しの飛脚は狼に相通らざる定に候間向後無據子細にて夜通しの飛脚出し候は、番頭え其旨を達し番頭の證文を以差出さるへく候飛脚請負之もの共にも此等之趣急度可被申付候道中にてても其心得を以改之若貫目重き荷物有之歟又は證文無之夜通し相通り候は、押置早速道中奉行え可訴之僉議之上飛脚宰領之ものは不及申右請負人迄可爲曲事旨申渡候間可有其心得候事

一江戸京大坂其外國々より町人請負にて令往來候御用之諸荷物近年貫目も重く荷數も多く道中人馬大分相立其上御用之儀を申立人馬賃錢不足に相拂其外不埒之仕方共有之由相聞候向後御定之外貫目重く不仕其荷數貫目にしたかひ相立候人馬之賃錢無相違拂之少も非分之儀仕間敷旨其御用達之面々より念を入

被申付以後右之類之儀無之様に可被申渡候道中にても改之若貫目重く候歟又は狼に荷數多く不審之儀も候は、たとひ御用之荷物の上し申とも繼送らす其所に留置早速道中奉行え可訴僉議之上荷物宰領は不及申請負人迄可爲曲事旨申渡候間可有其心得事

一道中宿々之もの共不埒之儀有之候節は旅人により其所之間屋年寄等二日路三日路も召よひ又は訴訟のために付添參候儀も有之由相聞候たとひ宿々之もの不届の仕方有之候共問屋年寄召呼候ては其宿人少になり其用も差支申事に候間向後は問屋年寄等召呼候儀は相止させ其趣をは道中奉行え被申達奉行所より僉議之上急度可申付候可有其心得事

右之條々近年道中之宿々御定之外に人馬多くかゝり其外旅人に不法之事とも有之宿々は不及申助郷村々迄も及困窮候由相訴候付委細穿鑿之上を以被仰出候向後書面之趣急度可被相守之候たとひ組中支配並家來之不法有之候とも其番頭役所主人之越度に可能成候間其旨を可被相心得者也

右之通正徳二辰年相觸候處近年狠に相成候様に相聞へ候自今右之趣猶又急度相
守候様に可仕候若此以後相背者於有之者吟味之上咎め可申付事

以上

延享四卯年三月

覺

一旅人之内定を破り無法成儀有之候は、觸書之趣を以相改若不相用候は、其所
々領主之役人え達し役人其段旅人え申聞其上にて異議に及び候は、差留置江
戸表え訴候様可仕事

一御代官所之儀も右之趣に準し取計可申事

一町人え會符をかし渡武家之荷物に致させ候儀有之由相聞へ候自今堅無用たる
へく候事

一近年宿々惡黨之者有之飛脚之者共え賃錢ねたり取旅人之泊々え相越酒手等ね
たり取候由自今右體之者於有之は其所に捕置御料は御代官私領は領主地頭え

早々可申出事

一人馬賃錢之儀 御朱印並御用之外は可相拂事候條宿々日締帳に委細記置宿中
者勿論助郷村々えも勘定相立候様問屋共常々可相心得事

一泊休之儀前廣に日限相極候は勿論差掛約束いたし候も縦輕き旅人たり共違變
無之様に本陣旅籠屋急度相心得可申事

一此度相觸候上は宿々之者共旅人え對し非儀を申懸賃銀入用多取候歎又は旅人
を滯せ候之儀有之候は、急度可申付事

延享四卯年三月

浦賀船積通船之儀享保五年申渡通船相止候品共も有之候處向後古來之通武器之
外は植木類庭石等迄も通船候様に浦賀奉行え申渡候間其段向々え寄々可被達置
候

十六日親王元服立坊ニツキ諸大名惣出仕公東親旅中幕府へ祝使トシテ榎本伊右衛
門ヲ出府セシム

四月二日近侍輩外様ノモノト參會ニ關シ内訓左ノ如シ

御側之面々之儀は外様之者え參會親く交り候事たとひ親類たりといふとも服忌、懸り候もの、外猥に參會被差留候段は古來之御大法有之事に候處前々不心得之輩有之事をなそらへ酒飯之出會或は夜中忍ひ候而參會等いたし候者も有之由相聞候付而去夏改而猶又被仰聞候處にいまた行届不申候哉此間御旅中におゐて御留守詰之面々着之節も閑談仕候衆も有之候様相聞候地他國ともに御奥廻り相勤候もの、儀は享保九年被仰出之趣も有之知音又は一所之勤仕候者と候ても其役退候ては其慎可有之事酒飯之儀は御法有之儀に候へは勿論之事候惣而御側所勤之面々は上之御居方御作法致勤辨被仰聞無之と候而も兼而身柄之令吟味被相勤候儀肝要に候箇様之内意度々申聞候へは勤苦敷被存候衆も可有之哉に候へ共御側中之勤方を以外様之風俗にも相移り候様に有之候へかしの御思召に候へは御心入を以被召仕候面々に候へは御思召にも相叶候様に被相勤度儀候此段御内意被申聞候様にと存候事

四日公江戸着七日上使十四日登營拜謝賜物如例

十二日遠近付福永忠右衛門江戸定居過失アリ蟄居中歸國之命アリシニ逃亡ニヨリ扶持方五人米十五石沒收

十六日二之丸殿舎焼失ス十七日諸大名惣出仕

同日神代三郎左衛門渡邊勘兵衛有福九郎右衛門藩邸近火ノトキ三丁人數引率消防

盡力ニヨリ各金三百匹下付

十八日濱崎船頭役後根忠七勤務上屢失態アリ三田尻船頭役ヲ命シ中船頭ニ加フ三

田尻中船頭河野彌兵衛ニ忠七後任ヲ命ス

十九日加判益田越中乘輿乞願許可誓詞ニ及ハス目付へ斷狀差出スヘキ命アリ是時

已ニ吾藩乘輿免許ヲ得シモノ左ノ如シ

穴	戸	出	雲	毛	利	筑	後
桂	主	殿	熊	谷	帶	刀	

二十日御馬乘安富新吉不良ノ行蹟アリ審問中發狂セシニヨリ判決ノ結果持掛米三

十俵外銀五百目高ニ直シ五十五石ノ内銀百十匁ヲ減シ殘米三十俵外銀三百九十目
合計高四十九石五斗代役安富吉右衛門ニ給與ス

同日大目付回狀左ノ如シ

家督被仰出老中招請之儀故無之及延引候面々も有之候向後左様に無之様に可致
候

右之趣可被相違候

廿四日江戸留守居堅田安房老中ニ任シ歸國命セラル紋章羽織一下付

廿六日大檢使用方檢使勸務ニ關シ訓示左ノ如シ

大 檢 使 中

右大檢使勤方之儀ハ肝要之役筋に候へは於諸役所廉直之見分を以萬事 御爲
能被相勤第一獻上物之品念入仕立旁隨分麤略無之様沙汰被仕候段勿論之事に
候別而御臺所中取方之儀は大段之御入用有之事に候條諸事遂僉議何にても存
寄候儀は萬端役人中申談改御吟味可有之事

一中取方御買上物直段極肝要之事に候御儉約御吟味を被盡諸事省略減少等被仰
付候ても御買上或は仕調之御用物直段之高下によつて莫太之御損徳有之事に
候直段定有之外は小々巨細之儀に至迄一々遂僉議尤直段定之有品たりとも不
絶遂吟味節々町方へも被罷出直聞あるひは入札等仕候て少にても御勝手能被
申合全前直段之見渡を以差出候やうなる儀被仕間敷候萬事前々被差出置候書
付之趣被相守可有所勤候事

一大御納戸御用物數々大切之品に候へは請拂は不能申御道具手置始末之致方諸
事之締り小々之儀に至る迄委數被遂僉議存寄有之儀は被相改大御納戸役被申
談不しまりの仕形無之様可有沙汰候

一御臺所之儀大段之御遣用有之所柄に候へは隨分無抜目見分被仕就中請物等有
之節は立合現物之善惡被致僉議掛目寸尺等改候儀は別而大切之事に候少之違
ひにて過分之徳失有之事に候條見分可被入念候此儀肝要に候事
但御臺所檢使並手付之もの立合改候儀は只今迄之通勿論に候事

附手付之者へ能々可被申付置候事

一御懸相之獻立兼而凡之被仰付も有之事候御用意之積り旁肝要に候條積り方御膳夫衆被申談御費無之様に可有沙汰候其品は手輕く候ても仕出糺抹之仕形無之鹽梅等念を入氣を付候やうに御膳夫衆並御煮方家具方えも可被申聞候事

但御菓子吸物等被差出候儀も同斷

一符込物之内手置によつて損申事に候條御臺所檢使並手付之者兼而心得肝要之事候各儀も不絶氣を付被致見分第一請方々々之役人中え能々可被申聞候事

一御銀子方呉服方濃物方御作事方御底えは大概御用方檢使出勤之事には候へとも各儀も不絶被罷出御用方檢使衆えも申談御進物之肴類其外買上諸物請拂手置始抹等之儀迄隨分氣を付け御費無之御勝手宜襟にと役人中えも可有沙汰候事

一諸役所之趣能々被致見分少も取繕なく廉直之筋を以可被申出候惣而諸役所之趣不絶密に被申聞候は、直に可承候事

右當番手之儀は別而重き御儉約に付江戸御遣用銀過分減少相成候故諸役所之入用銀をも三步引に被仰付候尋常之心得にては御間逢かたき段勿論に候條引請之役人中へも能々被致沙汰萬端御勝手能様可有心遣候事

延享四卯四月

用方檢使へ訓示ハ大檢使訓示ト粗同文ナルヲ以テ略ス

五月二日桃園天皇受禪。天皇諱遐仁。櫻町帝ノ第一皇子。此歲三月立坊宣下アリ。是ニ至テ御年七歳ニシテ受禪アリ。七日父帝ヲ尊ンテ太上天皇ト號シ櫻町宮ニ遷御アリ。廿二日家督相續ノ制發令左ノ如シ大目付同狀

母出走いたし行衛不相知其子部屋住にて罷在縦幼少にて右之譯不存候共家督相續之儀は難成候尤も他え養子に遣候儀も難成候事

但母家女にて候は、其沙汰不及候

右之趣寄々可被達置候

六月六日公來年賜暇歸國ノトキ暑氣ニ向フ木曾路旅行幕府へ乞願允可アリ

十二日松平兵部大輔宗矩ヲシテ刑部卿宗尹卿ノ長子小五郎ヲ養子トナサシム爾後三卿ノ子往々諸大名ノ養子トナル

十七日中屋敷及三十間堀屋敷勤務大番出入ニ關シ訓示左ノ如シ

一御中屋敷被差置候大番衆御上屋敷え非番之節御用付而被罷出歸夜に入候時は御中屋敷御裏年寄え當御目付衆より送り手紙差出候を取歸候儀御法之事候向後愈無相違様に可被相心得候事

一右大番衆御番代被致候而非番に相成御中屋敷え四時迄に被罷歸候には御目付衆より送り手紙之不及沙汰候段彌無相違候若御上屋敷に直様居留り自用被相調晝四時を過被罷歸候衆は御目付衆え居滞候段相届尤歸之節御中屋敷御裏年寄え御目付衆よりの送り手紙可被取歸候尤晝之中右之通之事候素より自用にて夜に入候迄被居滞候儀は不相成候儀彌御法之通無相違候事

覺

一三十間堀御屋敷被差置候大番衆御上屋敷え非番之節御用付而被罷出歸夜に入候時は御目付衆え相届罷歸可被申候事

一右大番衆御番代被致候而非番に相成三十間堀え四時迄被罷歸候には御目付衆え届には不及候若御上屋敷に直様居留り自用被相調晝四時を過被罷歸候衆は御目付衆え被居滞候段相届被罷歸候節も届可被申候尤晝之中右之通事候素より自用にて夜に入候迄被居滞候儀は不相成段御法之通無相違候事

右之通内意申達候様に若不心得之衆於有之は被及御沙汰候事

廿六日養子願ニ關シ發令左ノ如シ

只今迄養子又似養子願被差出候節近續之内相應之者無之候間此者相願候と申儀無之候向後右之趣被相認可被差出候且又近續之内弟甥従弟抔有之候へ共譯有之其者不相願候は先より斷申聞候と歎或病身と歎或存寄有之不相願候と歎其譯別紙書付差出候様に可被致候

右之趣寄々可被相達候

六月

廿九日朱印ノ寺社領之アル領主所替名替等ニ關シ大目付同狀左ノ如シ
寺社領 御朱印有之所之領主地頭所替村替或隱居家督名改又は頭支配等去冬以
來替り候分は其趣書付小出伊勢守井上遠江守え可被差出候尤寺社領 御朱印渡
濟候迄は右之通可相心得候委細は右兩人え可承合候
右之趣可被相觸候

六月

日不詳大城内出火ノトキ消防具提出スヘキ書付左ノ如シ

覺

一大張籠 三差 内小張籠二百四十入
一差八十宛入

一荷内張籠 三荷

以上

一右之品持手之事 一夜に入候は、印挑灯之事

右從公儀火消道具御用之由申來候節被差出候兼て用意仕置候事

卯六月

七月六日毛利伯耆關老本多伯耆守ニ障礙七郎兵衛ト改名セリ

廿四日諸臣秩祿増與明石ナク空石ノ輩御禮代ニ關シ訓令左ノ如シ

一當正月御加増被下候在府之面々來る八朔御加増御禮申上候事

一持懸りを以組替石直り被仰付候面々も御加増之御禮右同斷

一御禮代員數之儀御加増以後御根帳石直被仰付候高を以御仕法之通上納被仰付

候事

八月五日増山對馬守毛利護守 匡廣末子家督太刀馬代銀三枚樽代金五百匹二種ヲ贈リ祝セ
ラル

十一日松村彌兵衛心亂自殺セリ彌兵衛前功アリ親族ノ請願ヲ許可シ嫡子松村新十
郎へ家督ヲ命シ遠近付ニ加フ

十五日諸大名式日登營ノトキ殿中ニ於テ板倉修理勝該發狂シテ細川越中守宗孝ヲ

及云。騷擾報。告公退出後。供從ノ輩ニ慰命等左ノ如シ。延享四年四月五日同五辰
年正月迄諸事小々之控

一延享四年八月十五日五時前之御供揃にて月次之通。殿様御登。城被成候處に末御退出無之内不慮之事出來候由御様子も不相知御城内御門留相成候由早速御小人目付より御注進仕趣は今日於。殿中不慮之儀有之候得共此御方聊御支之儀も不被遊御座候内御供頭三戸首令より御小人目付相頼御注進申上候追々注進も脇よりも相知候付江戸當役熊谷帶刀申越公儀人兒玉市之助大下馬迄兒玉彦右衛門御陸之者相添大下馬まで差越入込候然處板倉修理殿於殿中亂心にて細川越中守殿え被切掛候處御疵深手にて早速越中守殿御下り之由大騷動に付今日は。御目見無之。上意有之而九半時分。御本丸御退出直様西丸え御出仕早速御退出直様御中屋敷え被成御出候事

渡邊久傳

右今日御退出以後爲伺。御機嫌遂出仕御座之間被召出之。御目見被仰付被遊御意候且又今日於。御城騷動之節彼者事氣を付心遣仕候付小書院於御椽煩

二汁五菜御膳通り之御料理被下之尤奥番頭格三戸首令今日御供仕候に付久傳相伴被仰付候今日は格別之御沙汰にて右之通被仰付候事

一右今日御供中何角心遣仕候付御供頭三戸首令を始御駕籠廻り之面々え左之通御意被成候事

三戸首令

小笠原治右衛門

島尾五郎右衛門

秋村十藏

馬屋原金五郎

杉山小十郎

能美庄右衛門

長井茂左衛門

右今日於。殿中不慮之儀有之御供中之儀は就中一往可奉氣遣候處聊御障之儀不被遊御座候此段申聞候様にとの御事

脇彦右衛門

河村彌右衛門

河野太郎兵衛

福原惣右衛門

寺内彌二右衛門

雜賀十右衛門

佐伯半左衛門

藤井嘉右衛門

右越同斷

高橋傳八

幸坂十兵衛

渡邊五郎左衛門

柏谷甚左衛門

守永庄藏

安藤貞右衛門

原田彌左衛門

大森文左衛門

三井藤兵衛

長谷川彌右衛門

羽仁長右衛門

有隅茂右衛門

室田又兵衛

御陸目付
松井七郎右衛門

羽根半右衛門

右今日於 殿中不慮之儀有之御供中之儀は就中一往可奉氣遣候處聊御障之儀
不被遊御座候此段可申聞候事

備考

徳川實紀曰八月十五日月なみの拜賀なれば群臣出仕す然るに細川越中守宗孝も
おなしくまうのほりしか辰のときはかりに大廣間のかはやのもとにいたりしに
うしろよりなにもともしれす差添もてきりつけたり朝會の輩擾騒してその事
聞え上しかは上直のくすしをはしめ朝參せし醫ともまてめしあつめられ療治せ
しめらるさて宗孝をあやめし者をたつね出さんとて目付等こゝかしこもとめし
にさらにたつね得すよて玄關のまいら戸をとさし諸門を打せて出入の人を禁す
かゝる内に宗孝いたてゆへ元氣よはりければことに奥醫武田叔庵信卿おなしく
外科西玄哲規弘に療治の事仰下りて葎湯をたまひ湯漬の飯を下されかれか家人
二人を殿中をめして看侍せしめらるやかて大廣間の厩の中に何ものともしれす
ひそみ居けるものありしかは尋よりてこれを見るに奇合板倉修理勝該なり目付
等事のさまとひきはめしに宗孝をあやめしよしをこたへたれとそゝろこといひ
て失心のさまなれば蘇鐵の間のかたにとらへ置網をかけたる轡にのせて水野大
監物忠辰にめしあつけらるこの事宗孝か家士に告しめられんとて中らひある織

田山城守信舊に命してかの邸にいたらしむ。さて宗孝を殿中まで橋かき入。家におくりかへさせ給ふ。このとき宿老いまたのほらさるまへなれば、よろつの事御側の輩御旨をうけ給はりて事はからひしとぞ。本多伯耆守正珍、少老本多伊豫守忠統は直月なれば、此事によりて速に出仕し、それより後の事ともはからひしなり。また永井伊賀守直陳御使奉はりて、宗孝が家にまかり御たつねの仰をつたへぬ。次の日堀田相模守正亮またその邸にいたり、さきに弟民部をかりの養子に聞へあけ置たれば、かつて繼嗣の事は心安かるへければ、しつかに手きす養ふへしと、いとねんころなる特旨をつたふ。

徳川十五代史曰勝該かねて狂疾ありて、奉仕すへき者にあらされはとて、宗家若年寄板倉佐渡守勝清か計らひにて、勝該を隠居させ、勝清か庶子もて家繼かせんとす。勝該之をきゝて怒りに堪えず、心狂はしくなりしかは、勝清其家人等に命して、家に押込おきしに、いかに誑かしてか今日營登して、勝清を殺さんと思ひ細川氏の家紋の板倉氏の紋に似通ひたるを以て、宗孝を殺害せしとぞ、害せし後も、ますく心亂

れて、其言ふ所、條理なかりしと云ふ

此事變に、臨み宗廣公細川家遺領繼嗣の事に援助を與へられしは、古來口碑に喧傳する處なるも、前記の外別に具體的の徵すへきものなし。遺徳談林所載出處詳ならずと雖も、収録して参考に資す

御家譜 延享四年八月十五日觀光公登營したるに、板倉修理喪心して營中にて細川侯を及す侯即死營中騷擾漸にして鎮定に就き列侯退出す是に於て公松平兵部大輔松平相模守と謀り三人後に在りて幕府の監察に面し細川氏の後ち異なきや否を問ひ且つ曰群臣の動搖測り難し我等國其經過する所なれば豫め承り其準備を爲す有んと殿中鬪争未た其議に至らず俄に議定し監察出來り細川氏の後繼變異なきを報す公即ち使臣を細川邸に發遣し其旨を報す因て上下鎮靜し敢て動搖を爲す無しと

是時邸前人馬釋騷城中事あるに似たり而て公は登營未た遠らす邸監島尾五郎右衛門急に政府に至り金を握し左右の袖に入れ走り出て櫻田門に至れば鎖て

内れす五郎右衛門術を盡して漸にして過るを得る如此する六次途に中の口に達するを得る公の健剛異無きを聞き急に還報す是に依りて邸内安堵す諸家人の城中に入る無し人皆島尾の老練敏捷を稱す

是騷擾の際我邸に出入する幕府坊主渡邊久傳營中に在て公の傍に侍し用を辨す營中殺害の事あれば大下馬に在る諸家の供從數十人其虚實を詳にせされは皆扼腕耳を敬つ島尾より聞各安心すと而て細川氏は其扈從の衆に命し平川口に至らしめ侯は綿を以て其體を包み之を臥褥に載せ之を扈從長に交付し官も亦た其輿を護し邸に送ると云ふ

十七日東叡山火防ヲ命セラル

廿日細川越中守宗孝卒ス細川實紀

廿三日板倉修理勝該ニ死ヲ賜フ細川實紀

九月五日毛利但馬守西城老中秋元但馬守ト支障シ山城守ト改名セリ

八日命シテ登營ノ大名各其席ニ在テ他ノ席ニ至ルコトヲ禁戒ス細川十五代史

十二日ヨリ十三日ニ至ル泰桓公十七回忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラル白銀五十枚米

二十俵納付十一日ヨリ十三日ニ至ル東光寺ニ於テ法會修セラル十二日高野山安養

院へ大坂留守居ヲシテ代拜香銀十枚ヲ納付セシム

廿一日曩ニ禁裡讓位受禪是日新天子即位天皇於是使者堅田安房ヲ上京拜賀セシメ

禁裡仙洞大宮ニ各太刀一腰及白銀ヲ獻セラル安房八月廿三日發程是日公列侯ト皆登營新天

子ノ即位ヲ拜賀セラル將軍ニ二種一荷前將軍大納言ニ各一種一荷ヲ獻セラル

十月朔日寄組出頭飯田舍人ニ氏家與三左衛門所管供步行公歸城迄管セシム

七日公來年二月頃賜暇ノ事乞願ナリシニ正月頃賜暇アルヘキ指令アリ因テ請願書

左ノ如シ

來夏朝鮮之信使來朝四五月之比參府之由承之候然處私領内長門國赤間關周防國上の關兩御馳走所え着岸前より數百艘之船差向置申儀に付例之通御暇被下國元より大坂迄船呼越候ては御用難達差問候間先達而御暇被下候歟又は信使來朝相濟候以後御暇被下候様仕度奉願候依之申上候以上

十月

御名

御付紙 來年正月比御暇可被下候之間其心得にて可被有之候
 別紙を以御願申上候通私儀來年例之通御暇被下之歸國之節大坂より國元迄陸路
 旅行仕候ても家來大勢且荷物等も數多之儀に付船無之候ては難相成御座候迎船
 大坂呼越候時は領内赤間關上の關信使着岸之節御用間に逢不申に付而其内御馳
 走所え差向置候船凡三百艘餘且又國中海上數十里に付若風波之時分湊々え繫船
 有之節之爲手當仕候付都合船數八百餘艘先格を以用意仕置候故船差問候間二月
 比にも御暇被下候様奉願候左様も難被爲成儀御座候は、信使來朝以後御暇被下
 候様仕度奉存候尤大坂より國元迄海上遙々之儀御座候へは右之船往返難成に付
 國中通船不相濟候ては大坂呼越候儀不相成候幸御暇之年並に御座候間先達而御
 暇被下歸國仕候は、諸事御馳走之手廻しも能可有御座と奉存候旁奉願儀御座候
 以上

御名

十一日諸大名領地ノ判物朱印ヲ賜フ徳川十五代史

十二日宗廣公第二子信子後改子萩ニ生ル母側室上田氏名戸名瀬大炊御門家ノ家司上田秋成ノ女ナリ

廿三日公來年歸國ノトキ木曾路旅行許可アリシニ正月頃賜暇ノ指示アルニヨリ木曾路ヲ止メ東海道經過ノ請願允可アリ

廿五日大坂表先納借年賦理ノ爲メ裏判役粟屋主殿手元役三戸與右衛門所帶方井上
 四郎左衛門矢島半左衛門ヲ上坂セシメ大坂留守居粟屋五郎兵衛生田八郎右衛門用
 達上田三郎左衛門同宗左衛門鴻池善八同善右衛門ト協議純熟ニヨリ當職益田河内
 國元ヨリ遠近方和智九郎左衛門ヲ出府公へ申告セシム因テ益田河内外六名上田三
 郎左衛門同宗左衛門鴻池善八同善右衛門へ褒詞及賞與差アリ

廿六日清水長左衛門來江戸留守居トシテ出府命セララル、ニツキ大頭役ヲ免シ堅田安房ニ大組物頭ノ惣頭ヲ命ス

十一月五日加判山内縫殿死去嫡子左近ニ香奠銀二枚下付

九日公ニ謁見ヲ爲サル嫡子改名ノトキ御禮代ニ及ハス幼少ニテモ養子許可後改

名ノトキ御禮代提出スヘキニ規定セリ

廿一日重大ノ事件ハ主人ノ名儀ヲ以テ伺書提出スヘキ閣老ヨリ演達アリ

只今迄事品により家來名前にて伺書被差出儀も有之候得共向後は參勤何等之外
重き儀は主人名前にて伺書可被差出事と思召候此段寄々申渡候様今朝松平右近
將監様被爲仰聞候由

廿四日大頭役堅田安房ニ加判役ヲ八組頭役浦主計若老中ニ任シ大頭役ヲ兒玉三郎
右衛門ニ八組頭役ヲ命ス

廿五日當番ノ輩外出ノトキ脇寄ニ關シ訓示左ノ如シ

一當番之節御使者其外御用付而被差出候節自用にて脇寄不仕段は勿論之事候且
非番より被差出候時分御用相濟直様無據自用にて脇寄仕候有之節は沙汰所え
相屈免許之上罷越尤不及暮内可被罷歸候事

一御用に付御貸馬被仰付候時分自用にて脇え被罷越候時は御貸馬之儀先達而可
被差返候事

右之通被仰付候尤脇寄之儀は兼而之御法度有之儀候へ共向後愈以右之通可被相
心得候若不心得之者於有之者急度可被及御沙汰候事

卯十二月二十五日

廿八日毛利彦次郎領地熊毛郡平生外四村玖珂郡差引河上兩村年來虫枯アリ平生村
ハ開作鹽濱多クシテ收獲少ク村民困窮ニ因リ來辰ヨリ午ニ至ル三年間代官所ノ處
理ヲ受ケントノ請願許可アリ

寛延元年七月戊辰正月公江戸邸ニ在リ

廿一日若年寄清水長左衛門江戸留守居任命ニツキ黒印令條ヲ授ク兼重茂左衛門ニ
大組織炮頭ヲ命ス兒玉傳兵衛ニ法林夫人裏老ヲ命シ黒印令條ヲ授ク

廿四日山中六之助外七名數年近侍奉仕ニヨリ各銀七枚下付

廿五日寶生新次郎晉出入隱居ニヨリ合力扶持十人嫡子新之允ニ下付

廿六日公歸國暇ヲ賜フ

同日毛利甲斐守ヨリ縁女へ納采ス

廿九日出頭徒士頭兼務祖式左中飯田舍人所管供歩行歸城當日ヨリ所管ヲ命ス

日不詳天樹院權西堂ニ縮緬二卷銀十枚下付大照院燒失以後兼住苦勞ニ因テナリ

二月三日公江戸發駕今春朝鮮使節至ルヲ以テ

三月三日公歸城江戸禮使福原式部ヨリ

信姫へ將軍ヨリ拜受品配賦左ノ如シ

縮緬一卷銀三枚 將軍ヨリ

縮緬一卷 大御所ヨリ

紗綾一卷 大納言ヨリ

干鯛一箱 今回始テ進セラル

四日三戸首令與番頭ヲ命ス

五日加判暫役堅田安房公歸國後勤績ノ命アリ

七日山内縫殿死去ニ付傳命左ノ如シ

山内左近

右父縫殿 御先代當 御代引續彼是之御役無間斷も相勤段々御用相立遂苦勞候

殊當 御代之儀は 上御幼少より御側近被召仕數年御馴染之事候處久々病氣養

生不叶不幸之段被聞召上いまた行詰たる年齢にても無之候處別而殘念御不便被

思召候段吳々被遊 御噂候事

十二日後十五日改毛利甲斐守匡敬後重第三子文之助後能守長州府中ニ生ル母家女利尾棟心院公邊ハ延

生年

廿一日河内山新兵衛ニ大檢使役ヲ命ス

同日公儀人井上半右衛門去々年巡見使へ國中付隨ノトキ勤務上失態アリ家祿三百

石ノ内二百石ヲ減シ隱居ヲ命シ殘高百石嫡子忠兵衛へ給與

四月四日朝鮮信使正使通政大夫洪啓禧副使通訓大馬關阿彌陀寺ノ客館ニ至ル老臣

突戸出雲副役佐世六郎左衛門以下十餘人款待如例六日出帆七日上關ニ着船老臣毛

利宮内及高洲平七等十餘人饗應九日出帆十日藝州蒲刈ニ至リ藝州吏員ニ交付シテ

歸ル

六日朝鮮使來朝ノトキ馬關ニ於ケル回船警備ノ爲メ手回足輕四人派出セシニ夜中
擊柝ノ命令ニ背キタルハ職務緩怠ニヨリ手回弓頭三戸源右衛門手回鐵砲頭宮城彦
八阿曾沼源左衛門宍道次郎左衛門免職逼塞ヲ命ス

同日益田助右衛門ニ長崎開役ヲ命ス

八日去年十二月二十日夜萩大納戸倉庫ニ盗人穿入金銀窃取ニヨリ審問判決ノ結果
大納戸頭人兒玉吉左衛門宍戸十兵衛免職逼塞隠居ヲ命ス檢使河井七右衛門高橋八
郎右衛門免職家祿十歩一減少隠居ヲ命ス役人阿座上藤右衛門同前役人靜間忠右衛
門池田新助三戸瀬兵衛逼塞隠居ヲ檢使暫役高橋源右衛門横山長右衛門免職逼塞ヲ
命ス犯人ハ入牢又ハ斬首ニ處ス

十三日山内左近ヨリ亡父縫殿遺物軸物二幅對ヲ花鳥周獻ス

十五日當職益田河内辭職留任馬ヲ賜フ山根七郎左衛門手回組ニ加ヘ側儒ヲ命ス

廿四日幕府赤坂今井臺明地二所吾藩へ預付保管セシム繪圖等詳細ノ記録アリ

同日朝鮮使來期ニヨリ六月參觀ノ輩木曾路旅行スヘシト令セリ大目付同狀

廿五日近侍ノ輩奉仕ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一御側廻リ被召仕候面々之儀は 上之御賢慮偏に御心入を以被召出事候へは御
時節柄候へ共銘々別而儉約を專にして費無之且々御奉公可申上心得勿論之事
候乍爾何ぞ非常之造佐入有之におゐては各別之儀候雖然右體之儀にて添書付
を以御役御斷申出候ても容易に御役被差替候様には不被爲成事付而御役をは
不被差替借銀返濟迄は如願身柄御扶持方成被仰付候間隨分諸事を差置儉約一
筋に相心得借銀返辨之上前々のことく所勤可被仰付候事
一右之趣候間御扶持方成御法も有之候へ共御側近被召仕候面々之儀は御役不被
差替儉約被仰付事候へは尋常之御扶持方成之心得にては不相立候間一廉儉約
之廉を立夜中にても他出堅可有用捨候事

但近親類之内大切之病人等有之各別之趣有之節は支配所え相届如御法夜中

外勤可仕候事

一御役不被成御免事付而身柄御手廻組に被差置諸事支配被仰付知行御惱之儀は引田方にて捌相成候事

一御役不被差替御手廻組に被差置事付而御用有之時節は折々被召出儀も可有之候事

一御役不被差替被差置事候へ共役付之面々御役料且衣裳銀等は御番被差除儉約被仰付儀に付其中者不被遣候事

右之通御仕法被仰出候條此辻を以可有沙汰候事

辰四月

廿六日講師津田忠助去年來明倫館繁忙ニヨリ金三兩下付粟屋主殿ニ金三兩三戸與右衛門所帶方兩人ニ銀十五枚粟屋五郎兵衛ニ銀二十枚生田八郎右衛門ニ銀七枚下付大坂先納借理ノ件ニ關シ苦勞ニ由テナリ

廿八日惣頭役吉村十郎左衛門ニ目付役ヲ命ス

五月五日近侍ノ輩奉仕ニ關シ目付中ヨリ伺ニ對シ指令左ノ如シ

此段時々支配方より知らせ候様に令沙汰候事

一御側廻り被召仕候面々之儀非常之造佐入有之無據添書付を以御役御斷申出如願御扶持方成被仰付候衆之儀此度御書付を以被仰出候御扶持方成御法も有之候へ共御側近被召仕候面々之儀は御役不被差替儉約被仰付事に候へは尋常之御扶持方成之心得にては不相立候付一廉儉約を立夜中にても他出堅可有用捨との御書付之旨候尤近親類之内太切之病人等有之格別之趣にも有之節は支配所え相届如御法夜中外勤可仕との御事候此段被差免候時々尋常之御扶持方成同様に遠近方より知らせ來候哉又は支配方より知らせ可有御座哉之事

此段御用有之被召出候節上下又は袴着用罷出候節は其時々支配方より知らせ候様に令沙汰候事

一御役御免不被成事候付身柄御手廻組に被差置諸事支配就被仰付候御用有之節は折々被召出儀も可有御座との御事候左様之筋上下袴等着用他行之儀是又時

々いつれより知せ來候哉之事

五月

御目付中

九日當島代官志賀平馬ニ大納戸役ヲ吉田孫右衛門ニ當島代官ヲ命ス

廿一日大組物頭湯淺伊右衛門組代七右衛門妻直訴ニ關シ審問ノ結果伊右衛門不公

平之處分ニツキ免職家祿ノ内五十石ヲ減シ逼塞ヲ免ス

晦日寺社奉行山内新右衛門辭職ヲ免シ羽二重單羽織下付兒玉縫殿ニ寺社奉行ヲ命

ス

六月朔日朝鮮ノ正使副使從事官登營引見アリ舊儀ノ如シ

二日當役熊谷帶刀辭職留任召下板羽織下付

廿一日上領清右衛門病氣隱居ノ請願ヲナス目付ヲ以テ病氣検査ノトキ他出セシハ

違法ニヨリ隱居ヲ命ス

七月五日手元役田坂半右衛門ニ直目付ヲ末國與左衛門ニ直目付ヲ命ス

十三日朝鮮信使歸途上關ニ至リ十五日馬關着船享待如例

十七日諸臣八朔謁見ニ關シ訓示左ノ如シ

御家來中 御目見前々一日に被仰付候へ共只様御人數相増到只今候ては一日

に 御目見被仰付候様に難相成候其上大御目見之時節寒暑之時分旁に付而當

八朔より日分にして左之通 御目見被仰付候事

八月朔日

一御與 御目見相濟御表被成御出御一門方より大組一番組迄

同 二日

一大組二番組より遠近付寺社組迄

同 三日

一無給以下町人迄

右之通當八朔御家來中 御目見三日に分け候而 御目見被仰付候條可有沙汰候

事

七月十七日

十八日營中ニ於テ延享ノ年號寛延ニ改元ノ臺命アリ

廿日生田八郎右衛門ニ大坂頭人暫役ヲ命シ粟屋五郎兵衛ト交代勤務ノ命アリ

同日五月四日公登山ノトキ要害不明門鍵不締アリ審問ノ結果要害番桂彦右衛門職

務緩怠ニヨリ逼塞ヲ命ス

廿四日四本松大腰掛馬立建ツ草舎年表

廿八日作事方生田伊右衛門辭職數年ノ勤勞ニヨリ銀十枚下付

八月朔日毛利松次郎山城守德山ニ於テ袖留ノ通報アリ使ヲシテ干鯛一箱ヲ遣リ祝

セシム

四日明倫館出勤講師及武藝師家へ戒飭訓示左ノ如シ

口達之覺

山縣少助

右館中出勤講師之面々心得之儀に付今般 御思召之筋申聞候只今之通聽衆等も

乏く衰に相成候段別面 御苦勞思召候畢竟講師之行規作法講讀之趣に依テ諸人

信仰之境可有之儀に候就夫講釋致方行規等之儀被成 御意且入學之諸生中心得

之 御尊之趣をも津田忠助小倉彦平申聞せ候其方只今所勤御了簡之身分に候得

共右之趣承知仕置思召に相叶候様に寄々申談候儀肝要に被思召候委曲は出勤之

儀 申聞候趣可有承知候此段可申聞旨候事

附リ諸藝師心得之趣に付被成 御意候筋申聞候此段をも承知仕置寄々心をも

付候様にとの思召候

津田忠助 小倉彦平

右各一列講釋之趣心得付ては一同に思召之筋被成 御意候然處學館入込之諸生

中心得近年いつとなく令混雜風俗惰弱之儀も間々有之様相聞候入學之面々は別

而學文一逼に志し縦初之參會も行規作法正敷况哉講釋等之席に臨み候ては猶又

拔群に行規能相心得講師を敬ひ諸人より見入之所も入學之輩相應相見候様に有

之度儀に候此段 思召之筋其方なと兩人え可申聞之旨被仰付候條被申聞猶又向

後右體之趣隨分氣を付規矩正敷相立勤學無怠様心遣肝要被 思召候旁可申聞旨

候事

附り手跡教道之儀も只今迄之通稽古場愈繁榮仕候様に有之度 御噂候

口達之覺

講師

小田村文助 津田忠助

小倉彦平 繁澤權兵衛

一講釋者聖賢之道を諸人之教へになす事候へは其座に付候ては第一其身之行規作法肝要に可相慎儀勿論之事候毎々人に依頼之輩も有之様に相聞へ甚其道に不叶候條其慎專に可相心得事

一本文之六義は勿論其事々に寄りひき事なと仕初心之者も其義理能聞請候様に講釋致し諸人能存付候様に可相勤候事

一講釋は其義理能分り候得は相濟事と見へ候へ共言葉遣ひ餘り田舎めき平口にては表方場所にて耳立惡敷候間此段も心を可相用候事

助講

佐々木源右衛門 佐々木織衛

山縣次郎右衛門

一講師四人之内差障候節は助講に罷出事に候へは晝夜不怠無他に執行可申儀は勿論候事

一助講に罷出候ゆへ猶又行規作法正敷其教へ諸人聞請能可相勤候事

右近年は講釋承候者自然と少く相成前々と違ひ大に衰へ罷成候隨分吟味諸人存付承り候もの多く聖賢之教廣まり候事肝要に候向後は講釋承罷出候面々其日々之面着差出候は、追々及沙汰多少之令僉議多人數續候て承候講師へは格別御沙汰筋も有之尤承候もの少き講師へは其趣に依而何分被仰付之御吟味可有之候此段講師助講共に能々相心得候様可申聞候事

口達之覺

山根七郎左衛門 草場平藏

一儒者之儀は聖賢之教之師に相成事候へは其身之行規作法正敷相慎諸人學文之道に志し候様に兼而門弟中取立候様に可相心得候事

吉田十郎左衛門 平岡彌三右衛門

多田藤左衛門 馬來宗六

内藤作兵衛 岡部半右衛門

栗屋彈藏 緒方仲助

北川貞之進 横地長左衛門

小笠原次郎太郎 大西助右衛門

松本伊兵衛 鹽谷源左衛門

岩崎九兵衛 山本六之助

一惣而師匠に相成候ものは第一其身之行規作法肝要之事候條萬事可相慎候事

一其家々之業代々を経末に相成候程古代之趣令混雜候様相成ものに候隨分令僉

議晝夜其工夫專一に候事

一稽古場にて諸事作法猥に無之様に可相慎段は勿論之事に候銘々其所作之利非を論し身分々々之執行に罷成候様に相互に心を用ひ門弟中も師恩之德義に存

付候様可致候事

十五日公儀人兒玉市之介ニ記録所役ヲ命ス

十八日乃美藏人ハ長壽且子孫衆多ナリ信姫ヲ藏人夫婦子分トナシ名ヲ提出八十八

ニ増歳スヘキ命アリ召下麻上下八十八ヲ折紙ニ認メ金千匹下付藏人提供名ヲ誠姫

ト改メラル藏人八十八ヲ祝シ米ノ字獻上ニヨリ藏人へ鳩杖鹽鶴一隻島羽二重一匹

紅裏一匹藏人妻へ緋繪子小袖一白無垢小袖一下付アリ

十九日去十二日毛利大藏死去嫡子七郎兵衛ニ香奠銀三枚下付

廿三日信姫名ヲ誠ニ改ム

廿八日信使來朝ノトキ用金調達ニ關シ苦勞ニヨリ濱崎町山縣十左衛門山口町阿部

平右衛門當町井上市郎右衛門岡孫七山中六右衛門ニ各俵子三十俵當町溝部安内ニ

俵子十俵各其身一代下付

日不詳供步行兩組永練公覽好成績ニヨリ各金三百匹二百匹下付

九月二日國內大風雨洪水田圃損亡高九萬七千二百三十一石家額大小六千八百三十三戸寺社七十字破船二百一十一艘人死三十九名被疵三十七名牛馬死十一頭ナリ

八日櫻田邸玄關新築今日新ノ初ヲ爲ス翌年三月ニ至リ竣成

十一日池田丹波守死去備前山法林夫人室吉元公從弟ノ續ニヨリ定式ノ忌受ラル江戸三

邸三日間鳴物停止

十二日藏元兩人役長井文左衛門ニ京都留守居役ヲ木梨彌右衛門ニ藏元兩人役ヲ命ス

十六日公深川温泉ニ浴セラレ十月朔日還城近村ノ高壽十四人及孝子某ヲ賞セラレ鳥目若干文ヲ賜フ

廿一日毛利甲斐守匡敬立花飛彈守貞淑女ヲ娶ル

廿四日根來主馬下屋敷接近立銀山ノ内松木雜木採用出願許可アリ伐採後検査アリシニ無免許松木多數濫伐セシニヨリ立銀山一町二反五畝沒收遠慮ヲ免サル

廿六日毛利甲斐守舉婚儀使ヲシテ太刀馬代紗綾二十卷一荷二種甲斐守へ紗綾十卷一荷二種夫人へ紗綾五卷二種五百匹心涼院吉元公息女毛利主水正師就室へ遣リ祝セラレ

十月十五日大坂惣年寄役薩摩屋徳次郎父仁兵衛ニ繼續吾藩名代役ヲモ勤務セシニヨリ年來ノ合力米賣延米等下付セラレ

同日書院役玉井丑之允辭職十七年勤務ニヨリ遣小袖下付

十九日藝州殿島ニ吾藩ヨリ住居ヲ許サレタル兒玉新右衛門居家大風ニ倒レタルヲ以テ負債ノ請願アルモ許可ヲ與ヘス銀三十枚下付

閏十月十六日薩小路上水出榊埋榊吐樋等修築竣工ニツキ吾藩石高賦課金七十四兩二歩ト銀八匁九分五厘五毛交付セリ

廿一日京都留守居山縣藤助ニ當役手元役ヲ命ス

廿二日粟屋彈藏公歩行ノトキ始テ鴨ヲ射留タルニヨリ金一兩下付

廿七日禁裡大掌會執行ニツキ京都留守居ヨリ當役へ町觸報告左ノ如シ

覺

一大堂會被行候付來る二十八日より十二月朔日迄御神事間 御所より道法二里計之間寺々は勿論鐘鉦打候儀堅可爲停止候尤諸法事執行候共隠便可相慎候事

一御築地之内僧尼並法體之輩往來停止之事

但其形俗體に拵隠便に住來不苦候事

一御築地之内不淨之輩往來停止之事

以上

廿八日學頭役山縣少助辭職ヲ許ス儒家ノ斗泰タルニヨリ役人格ニテ目今ノ役席ニ置キ一年間銀一貫五百目宛下付講師津田忠助小倉彦平兩人ニ學頭役ヲ命ス明倫館役舍一年交番トシ彦平ヲ手回組ニ加ヘ側儒ノ格ト爲ス

日不詳目付役赤木藤右衛門十年精勤ニヨリ紋章上下下付

十一月三日内海左平次角觥場ニ於テ粟屋帶刀領民某ノ慮外ヲ怒リ及傷ニ及ヒタルハ不法ニヨリ逼塞ヲ命ス

四日公來年參觀時節伺書ニ來年四月中參府アルヘキ指令アリ

五日將軍通駕ノトキ横小路警備ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

御規式並御鷹野 御成之節御道筋屋敷々々辻番所に役人兩三人程宛罷出拂之御徒出候と直に辻番人召連横小路前々より立切候場所え罷越相固罷在候由に候然處拂之御徒出候と立切之場所えは番人計差遣役人は屋敷内え引取せ候面々も有之由相聞候 御成先人留め大切之儀候間向後 御成之節前條之通拂之御徒出候は、辻番所に罷出候役人共番人引連立切之番所え罷越相固可申事 右之趣萬石以上之面々え可有通達候

十二日郡奉行坂九郎左衛門辭職ヲ許シ町奉行中川與右衛門ニ後任ヲ命ス目付役赤木藤右衛門ニ町奉行ヲ命ス秋里五郎左衛門ニ目付役ヲ命ス

十六日柏村忠右衛門信使來朝馬關派出ノトキ人夫賃錢略取ニヨリ家祿沒收流刑ニ處ス

廿日當職益田河内ヨリ提出セシ歲計地方大坂不足額及米一萬石頼母子方法左ノ如

覺

一銀三千四十九貫七百目餘

但辰の八月より己の七月迄當る御不足之分

一米二萬石程

此代千百七十六貫四百目餘

但當秋風損に付御所務落之分和市一石七斗替にして

銀單にして合四千二百二十六貫百目餘

但御不足辻

米一萬石頼母子

公儀二口

山口徳地

船木吉田

萩市中一口

三田尻小郡

都野熊毛

當島奥阿武

兩大津美稱

上之關大島兩山代

今一口諸郡惣配當石に付二合程

右當年 公儀一番取來己之年よりは諸郡半口宛分取仕せ候時は酉の年に至り五

箇年目には一通り相當一廉地下重寶に可相成候事

一公儀より御懸米年貢立用にして可被遣候事

一諸郡御代官所沙汰にして取遣り質物等大庄屋締り尤御代官沙汰被仰付候事

右之外仕法は御代官中存寄可有之儀後年しまり宜候へは公私之爲宜儀候事

廿六日林半次郎父茂右衛門發狂幽閉中逃走石川十左衛門宅へ闖入及傷ニ及ヒ亂暴

ノ行動アリ父ノ罪科ニ座シ家祿三分一減少逼塞ヲ免ス此他親族處罰アリ

日不詳御城當番ノ面々記録所呼出候テ御館之間ト申ス名目計ニテ只今迄御持館ノ

外ハ無之ニ付今度御館六十本御掛サセ被成候へハ左様承置候ニト出頭祖式左中相

授候事草舎年表、遠徳談林、寛延二年正月十四日思召ナ

十二月十一日禁裡水痘酒湯式終了ニヨリ諸大名惣出仕萩ヨリ小幡小平太ヲ祝使トシテ出府セシム

十五日琉球國使引見アリ舊禮ノ如シ

十七日粟屋彈藏公ニ弓法傳授鳴弦法書物免許狀印可狀完了ニヨリ之ヲ祝シ鮮鯛一折獻上セリ彈藏へ上下一具太刀一腰金十兩下付

十九日驛傳奉書ヲ以テ鷹捉ノ鶴ヲ賜フ翌二年正月二日萩ニ於テ拜受ス

廿八日本雇中謁見請願ニヨリ勤役ノ輩年始一度謁見ニ關シ伺定左ノ如シ

本 御 雇 中

右近年身柄一代侍御雇之者共年始一度宛之御目見被仰付候本御雇之者とも儀は只今迄御目見被仰付候格無御座此度 御目見之儀奉願候此者共儀は大組以下諸士中二男三男よりも被召仕且御利徳雇勤功積候者之儀は本御雇被召直候然共御根帳付之御普代と申にても無之先は其身一代切之者共故右之通之御沙汰御座候右面々御遣方之儀は無給通所勤之場所えは一切被召仕候天下御物送り場並諸郡

御算用方役相勤候節は右役座に付而御通路之時分は 御目見をも仕且 大公儀御役人方並他國人出會等も被仰付候右之節は人張をも被仰付御仕成宜被召仕候尤勤功相積候へは御根帳付御普代に被仰付候身元無給通以上より出候者は無給通に被仰付御陸以下より出候者は御陸以下へ被仰付候尤御恩米等被下置候儀も御普代同前切手を以勘渡被仰付候諸事御仕成は御普代に相替儀は無御座候尤本御雇御利徳雇子共之義御陸以下えの養子取組をは被仰付候御仕法に御座候右一代侍御雇之御見渡も有之儀御座候間本御雇之者共儀は御役相勤候者計在役中年始一度宛之 御目見可被仰付哉

右ノ伺書ニ對シ年始一度謁見許サル、ニヨリ其人名記アリ略

同日大組弓鐵炮足輕仕役ニ關シ地江戸老臣ヨリ大頭役浦主計へ訓令左ノ如シ

覺

大組御弓鐵炮足輕仕役之儀萬治御條目且又往古より 御代始請狀之旨も有之候處何となく仕役之差別差間有之由に付享保五年被仰出之趣有之候得共其譯に付

ては下之心得區々にて却而種々之申結令出來彌以御遣方之御妨に相成 御爲に
付甚不宜儀に候依之先達而益田越中言上之趣も有之被是不被得止此度仕役之法
別紙之通被仰付候條此旨宜相守候然る上は御弓鐵炮頭中令一和足輕共折相能遂
其節候様可被申渡候向後若無筋御斷於不相止者屹と可被處殿科候依品物頭越度
可被仰付旨候右之通に付年來之申結之儀は一向不及御沙汰候以上

寛延元十二月

熊 帶 刀
堅 安 房
益 河 内
益 越 中
毛 築 後
尖 出 雲

浦 主 計殿

御弓之者仕役定座

- 一 御城記録所後御廊下番所
- 一 御能之節家具方
- 一 御禮錢方手子
- 一 御香奠方手子
- 一 御作善之節御座敷番
- 一 信使客館御座敷番
- 一 御作事方本締手子
- 一 御武器方内勘手子
- 一 遊行上人宿寺下用方家具方座敷番
- 一 於江戸公儀所付
- 一 同御家具方
- 一 大坂石番
- 一 同御運送紙見届手子

御鐵炮之者仕役定座

一御城六箇所辻番所

一御本丸土橋立番張番

一御作善之押御寺内小番所

但地他國共

一御巡見使御供押役

一御能之節御式臺前並車寄御門番

一江戸三御屋敷外辻番所

一櫻田新御門番

但此御門番御鐵炮之者定座候へ共御着御發駕前後之儀は御無人之儀に付近年之通詰懸り人數を以御弓御鐵炮之者入交所勤被仰付候事

一麻布清水口御門番谷御門番

一御作善之節石旗番法界門雁木口

一御備内合羽才料

以上

一御城御煤拂之節御弓御鐵炮之者手代りに締被差出候事

一住吉祭禮之節御棧敷前張番御弓鐵炮入交被差出候事

一麻布御屋敷中仕切御門番人入交之事

一御末家方御出萩之節御旅宿御本門入交之事

一惣而印羽織杖にて所勤之場所入交之事

一遊行大衆道案内並山口宿寺打廻り入交之事

一於江戸御作善之節上下着用之場所御弓之者定座之外入交之事

一江戸御上下並御湯治等之節御旅館小番所惣而御供連且廉有御國役之節は御弓

御鐵炮入交其外之小番所は御鐵炮之者可相勤候事

一御寺方御法事之節裏門番所之儀は御本門御弓頭所勤之時は御弓之者御鐵炮頭之時は御鐵炮之者被差出候事

一大組以上御役に付侍分にして御付人御弓御鐵炮之者入交可勤候事
附遠近付寺社組にても大組以上に準し候御役之節は御付け之事
一右之外古來よりの儀は不及申向後新規之御役場御弓御鐵炮仕役入交被仰付候
此儀私之例を以御役之時不可難溢段萬治御條目之旨彌以可相守候事
右之通被相定候以上

寛延元辰十二月

同日郷田宗真ニ誠姫病氣ノトキ苦勞ニヨリ金五兩掠木順快ニ金三兩下付
月日不詳坪井彦右衛門養子三度違變ニヨリ給米銀沒收

毛利十一代史卷之六十七

大田報助編次

觀光公記十

寛延二年己巳正月公萩ニ在リ

六日佐波郡宮市驛失火家屋大小百四十六戸燒亡之ヲ幕府ニ報ス

廿九日西御殿醫李家文讓辭職銀五枚下付野村左中數年學館入寮勉學ニヨリ銀六十
目下付永田瀨兵衛先代以來擔任ノ系譜編修成ルニヨリ紋章小袖一金十兩下付山縣
少助德田幸助安部吉右衛門永田瀨兵衛編修事務ニ管與シタルヲ以テ銀二枚下付高
野八郎右衛門同前銀百二十目。中村平馬同八十目。村上十右衛門同五十目。御手洗貞右
衛門同三十目下付。大坂頭人粟屋五郎兵衛齡七十ニ達シ辭職銀二十枚。河北長左衛門
粟屋善兵衛。毛利大藏當職在勤中。計算一紙結了ニヨリ各銀一枚下付
晦日毛利山城守實母良壽院江戸ニ於テ死去德山ヨリ訃音アリ萩地鳴物停止三日間

日不詳井上源三郎所有着込ノ鑲公收ニツキ銀十枚下付
二月五日櫻井善左衛門印刀彫刻家業ナルモ吉田十郎左衛門家傳山家流軍法專心造詣スル所アリ軍貝吹ニ業務變更命セラル
十四日根來主馬預付ノ鷹返上命セラル鷹ノ使用熟練公歩行ノトキ屢供從苦勞ニヨリ銀十枚下付

同日馬屋原四郎兵衛會テ彌四郎ト稱セシトキ馬屋原半左衛門兩人四郎兵衛ト改名ノ出願衝突セリ同氏同名ハ許可ヲ與ヘサル法規アルヲ以テ組頭願書却下セリ是時彌四郎相組證人佐々木五郎左衛門ト半左衛門相組證人奥平半左衛門ト協議シ向後兩人ノ内四郎兵衛ト改名出願セハ互ニ通告スヘク又彌四郎半左衛門ヘモ此旨内報セリ爾後半左衛門扶持方成中彌四郎四郎兵衛ト改名許可ヲ得タリ此改名ニ關シテハ彌四郎ヨリ半左衛門ヘ照會五郎左衛門ヨリ半左衛門支配方ヘ通報ノ後出願スヘキモ其事ナキヲ以テ半左衛門前件ノ事實ヲ上告セリ因テ四郎兵衛五郎左衛門ヘ尋問ノ結果公裁ヲ煩スヲ以テ四郎兵衛五郎左衛門差控半左衛門呵責セラル是ニ於テ

同氏兩家ヨリ同名出願ニ關シ訓令左ノ如シ

覺

御家來中同氏之兩家より同名を願出候衆有之兩家共不及沙汰願書付差返候儀彼是有之候古き家筋之儀は本末分明候ても父祖之志を以先祖之名を次男三男に付け置子孫に至りおのつから家名之様に相成たるも可有之候右之類當時見渡之道理を以及爭論 公儀え申出被遂御僉議候ても其證據不分明本體は差置申結之是非によつて御咎も有之様相成候ては甚以不宜儀候惣而他門にても一和仕遂御奉公候儀勿論候處親族間是等之儀申募御妨を懸候儀有之間敷儀に付自今以後兩家爭有之名願出候儀一向被差留候萬一不折合之内相願縱被遂御裁許候以後たり共一方より不折合之段申出候は不構理非了簡可被仰付候事

附只今迄先祖名之儀に付申結有之衆名替相願被遂御許容候も有之由候得共此度之御沙汰以前之儀に付名替は不被仰付候以來代替り等に至り名之爭於有之は前條之趣可被相心得候事

一同氏同名有之候ては紛らはしき儀に付本人嫡子共に申合改候様にと元文五年被仰付於于今は同氏同名之衆無之候然處嫡子令出生名付仕置追而申出儀に付自然と同氏同名令出来候箇様之節は遠近方より雙方え内意可相達候條申談一方可有名替候若申談難折相趣も候は雙方共可被相改候事
右之通相心得候様組支配えも可被申觸候以上

寛延二巳の二月

廿五日莊園ノ制發布アリ左ノ如シ大目付同狀

一新規に抱屋敷出来候儀は決而不相成候
一御三家諸大名を始惣而御目見以上之分由緒無之候共相互に讓渡讓請候様可致候

但抱屋敷數二つ迄は不苦候其餘は難成候只今迄持來候分は不苦候

一御目見以下並陪臣寺社百姓町人より御目見以上之面々え讓渡候儀由緒無之候ても可相濟候 御目見以上之面々より讓渡候儀は陪臣百姓えは由緒無之候て

も不苦候寺社町人えは可爲無用候

但百姓所持之抱屋敷圍等も有之候は讓請抱屋敷に致候儀不苦候百姓所持之畑地を讓請抱屋敷に致候儀は可爲無用候

一御目見以下並陪臣寺社百姓町人由緒無之候共相互に讓渡讓請候様可致候

右之内

一武士より町人え讓渡候儀は可爲無用

一町人より武士え讓渡候儀は不苦候

一百姓所持之抱屋敷を町人え讓渡候儀は難成候

一寺社抱屋敷は由緒無之候共讓渡候儀武家町人之無差別可相濟候

一惣而抱屋敷を百姓え遣候儀は 御目見以上以下何方より願出候共由緒無之候ても可相濟候

一家來所持之抱屋敷町屋敷を主人屋敷に仕候儀又は主人所持之抱屋敷町屋敷を家來中え遣候儀由緒無之候共可相濟候

一惣而讓渡候抱屋敷を又候外え讓渡候儀は年數之無差別可相濟候

一町屋敷讓渡之儀は町人より百姓えは難成候右之通向後可被相心得候

一抱屋敷相對替之儀も向後讓渡讓請之通相心得可被取計候

巳二月

右之通屋敷改え申渡候間爲心得寄々可被達候

廿八日毛利大藏享保十八年五月ヨリ元文三年六月ニ至ル當職役中防長兩國藏入所

務方收支計算一紙編成公覽ニ供ス

覺

一惣高二百三十萬四千七百九十三石五斗六升

内

八百三十石一升 新開

右之物成

米六十六萬九千九百九十八石四斗一升

銀三萬六千七百七十四貫百七十三匁

内拂

米六十三萬六千五百五十八石七斗七升

銀三萬四千二百五十八貫三百十七匁

殘米二萬五千四百三十九石六斗四升

銀二千五百十五貫八百五十六匁

右貸付米銀共後任山内縫殿へ交付

同日能役者ノ内帶刀免許ノ請願アリ松頭吉左衛門外七人其身一代帶刀免サル

同日生田八郎右衛門ニ大坂頭入役ヲ命ス

日不詳御留守中萩内失火ノトキ萩城出勤ノ定左ノ如シ

一萩内自然失火之節不依遠近 御城出勤之面々此度左之通被相定候條早速罷出

可被遂其節候事

一御城代役之儀は 御城内え早速被罷出前々之通可被相勤候事

一大組之頭 御城當番之衆は 御城被罷出前々之通可有所勤候事

附御城番大組番頭衆證人之儀も前々之通可被罷出候事

一御目付衆一人 御城罷出可有見合候事

附御徒士目付兩人 御城罷出候様に可被申付候事

一御旗奉行衆御鎗奉行衆四本松迄可被罷出候事

一御使番衆一人 御城可被罷出候事

一御手廻物頭衆大手三ツ之御門當番之外は組之者召連四本松迄可被罷出候若病氣等之節は組之者組代相添可被差出候事

一大組物頭衆一人宛東南之御門出勤可有候事

一大組物頭衆兩人組之者召連四本松迄可被罷出候事

一御大工頭一人被差出候條組之者之儀は御作事方定役付之外之者召連四本松迄可被罷出候若病氣等にて頭之内罷出候衆無之時は組之者え組代相添可被差出候事

一御城内に役所有之罷出來候衆之儀は常之通可被相心得候事

一當町之者二町宛一箇月替にして於町奉行所兼而催相を定置町昇に人數を差添

四本松迄相揃諸士に入交往來之妨に不相成様に可有沙汰候尤御客屋付役人

一人宛相添可被差出候事

一御作事木屋懸込日用五十人慥成者相改兼而割符之木札を渡置日用頭一人相添御城内御作事方迄罷出候様可有沙汰候此者共之儀は町役にて火事場罷出候儀差除候様に可被申付候事

附遠方之火事或は小火にて早速鎮り申程之事に候は、御城内え入込に不

及東御門之外御藏元長屋之下往來之妨に不相成様に揃居御作事方之可隨

差圖候自然程近く出火或は大火之節は風並次第に寄御作事方えかけ込候様兼而可被申付候事

一御本丸え出入之儀は御本丸御門御臺所御門往來可被仕候若其外之御門出入被仰付候節は當役中差圖可有之候事

附御城内出入之儀は享保年中にも被仰出候通南之御門御開せ不被成内は東御門より出入被仰付候事

附御城近之火事にて風並悪敷或は大火之節は當役中差圖次第四本松迄出勤之面々二ノ御曲輸入込可被申候其節東南之御門御開せ被成候事

一御城内に有之火消道具一箇年に三度宛時節を定御作事方役人見分仕損しの分は取繕或は仕足し候而物數減少無之様に可被申付候事

一御城内諸所水溜所並御屋根に有之水溜桶ともに御作事方より一箇月兩度宛見分申付水減不申様に可有沙汰候事

一右之外享保十一年被仰出候御法無相違候事

右御留守之節萩内失火之時分 御城内爲火用心前書之通被相定候條被存此旨組支配中へも可被申渡候以上

寛延二巳二月

日不詳番手ノ輩旅役出米ニ關シ訓示左ノ如シ

御番手之面々旅役出米を以御勘渡被仰付候儀近來五割増御引せ候而右引方之分餘程 公儀御徳用に相備る積り歟と心得候者有之様に相聞候文銀通用以後五割増相添候ては百石五石之出米にて年來御勘渡令不足候へ共右之石數は先年以來被定置たる儀故不足之所増出米不被仰付此内者 公儀御借銀にて増勘渡相成根之御借銀之外右之御借銀計も莫太之儀依之去る寅の年御仕組段々被遂僉議諸事之御省略一同に割増御引せ被成候旅役銀之儀は勿論江戸御番手に不限京大坂長崎等之旅役其外不時之御使是以旅役銀被立遣候儀此外於江戸者御番手御貸人等無據御入目も有之又は運賃入足米御扶持方米等一切差引被仰付候ては御留守番手を押候ても御不足相立つ積に候然處於下 公儀委細之趣を不存銘々内々之算用を以御勝手之筋有之様存候段無其謂儀に候然者追々當御番手をも被仰出候儀愈各別之御了簡無之事候條其段堅相心得御番手相成間敷と存候面々は前廉被仰聞候通先達而御斷可申候事

寛延二巳二月

日不詳御留守中萩内失火城代出勤ノトキ高張挑灯ニ關シ伺定左ノ如シ

御留守中萩内自然失火有之御城代出勤之節高挑灯二ノ御郭内え入候流例之由御座候此儀御書付に無之儀に付差留候段物頭中より申出候物頭高挑灯之儀は御番所迄持入且燭硝藏出勤之物頭も持せ罷出候儀御城代之儀も御留守肝要之御役座之儀に候へは可被差免儀歟共相見へ候へ共去年御留守之内申出候付先流例之通心得居候様に申聞置候向後は被差免苦間敷儀と存候如何可被仰付候哉

日不詳大番以上ノ輩乗馬ニ關シ訓示左ノ左シ

一大番以上之面々常々馬嗜候儀は今更不逮申聞候に勿論之儀候得共馬之儀は外之藝とも違ひ別而武士たるもの肝要修練仕候はて不叶事候向後彌以不怠執行可仕候尤流儀數多之事候得は銘々存寄之師家え付令修練外之流儀と混雜不仕やうに相心得可有稽古候事

一明倫館諸武藝一箇月一度宛爲見分當役中罷出候付明倫館前之於馬場右之日馬稽古之儀も見分被仰付候依之御馬乗中えも右之趣申聞せ一箇月一度一師匠宛

代り々々罷出弟子中馬稽古被仰付候間其師家々々之門弟中も右之日罷出可有乘馬候事

一功者之面々兼而馬稽古之節も罷出候へは未熟之者共之爲にも相成彌稽古不怠修練之虫食相成事候間節々罷出可有乘馬候尤一箇月一度宛館中前於馬場馬稽古之節も罷出乘馬可仕候事

一近年江戸御番手被仰渡候面々之儀其時々馬稽古之儀沙汰有之儀候へ共此度右之通被仰出候上は御番手之面々とても各別馬稽古之儀時々之不逮沙汰事候然とも御番手被仰渡候面々は猶又繁々罷出可有乘馬候尤館中前馬場にて一箇月一度宛馬稽古之節御番手之面々之儀は勿論いつれの師家へも付候而可有乘馬候尤流儀之儀は銘々師傅之通無相違様に可相心得候事

一一箇月一度宛館中前之於馬場馬稽古之節は其師家々々之弟子中於館中着到被仰付候條面着方役人へ相達候而名前付候事

右之通被仰出候以上

寛延二二月

御馬乗 中え

右御書付之寫仕爲心得相渡置候事

三月朔日公江戸發駕ニ先チ諸臣祿高百石ニ十石懸ヲ給與セラレ、ノ令ヲ發セリ其
文左ノ如シ

數年所帶不勝手の所に去る丑の年國中洪水の費且大坂表の借銀過分之儀至極差
間につたる寅の年仕組申付稠敷儉約を盡し猶家來中よりも三箇年之間出米申付
候然處其後も國中風水之損亡うち續き其上不意の造佐入過分の處に猶又去年朝
鮮人來歸之入用夥敷地道差湊之上又々去秋も大風に付餘分の所務落彼是工面令
相違いか程儉約吟味を盡し候ても莫太の不足此上各別の絶方便候近年も引續出
米申付候儀に付敷の品も申付度儀候處に右之通にて當年も無據家來中よりの出
米員數を減し馳走を請るの外これなく銘々も困窮の時節此段至て心外の儀なか
ら各別の不及手段候於下も此時の儀随分儉約を用ひ且々にも取續き奉公遂るに

おゐては祝着たるへし委細年寄共より申聞すへき者也

寛延二年三月朔日 御黒印

覺

去る寅の年御仕組之趣被仰聞候通御所帶至極之御差間につて種々被盡御吟味先
六箇年之間稠敷被遂御儉約候段被 仰出御家頼中御馳走之儀も寅卯辰三箇年出
米被仰付候然者御家頼中も下地逼迫之儀相續御馳走被請候段別而 御氣毒に被
思召何卒重御儉約之出目を以御摺合せ一箇年成共御馳走被差除度との 御思
食に付當役中段々僉議被仰付候處近年打續御國中風水之損亡夥敷其上公儀御代
替に付而不意之御造佐入過分之儀自他御遣用をも御取飲且々御間被合候處猶又
去年官人來歸之御入用御積り之外莫太之御入増色々工面御作略にて漸御手合候
へ共地道御差湊之上大段之御臨時相立彌増之御差間殊去九月大風に付熊毛上ノ
關大島郡にて現米二萬石餘之御所務落彼是轟と御手違に相成如何程被盡御方便
候ても右御不足之所急に御立戻し難相成行詰被絶御吟味此上格別之御趣向無之

餘分之出米被仰付之外無之候へ共御家中之儀分而 御苦勞に被 思召少成とも
軽く被仰付との御事にて近年之員數一石被減之無據當年も旅役米之外五石宛出
米被仰付候誠以大切之御時節乍難儀御奉公之筋無忘却被遂御馳走候様にと被思
召候條面々も此時之儀隨分被致儉約御扶持方同前之居形を以且々も取續可被遂
御馳走候事

一御儉約之儀におゐては寅の年委細被 仰出候廉々少も無相違愁訴斷等愈被差
留候事

一御馳走出米段分其外別紙仕法書被仰付候事
右之通被仰出候間御家頼中大小身共に被存此旨諸事省略之吟味を以取續被遂御
奉公候心得肝要に被 思召候此段可申聞旨候以上

巳三月

益 河 内
堅 安 房
熊 帶 刀

益 越 中
毛 筑 後
穴 出 雲

旅役出米並御馳走出米段分

一高百石以上

但旅役出米高百石に付現米五石宛御馳走出米高百石に付現米五石宛以上十
石懸り

一同七十石以上

但旅役出米並御馳走出米共高百石に付現米九石懸り

一同五十石以上

但同斷高百石に付現米七石五斗懸り

一同四十石以上

但同斷高百石に付現米六石懸り

一 同三十九石九斗以下

但同斷高百石に付現米四石五斗懸り

一 足輕以下

但手取之現米十石に付四斗懸り

一 病者幼少御扶持方成之儀高百石以上之儀は高百石に付一石二斗五升宛高百石以下之儀は夫々之段分辻出米え右之當りを以増出米被仰付候事

一 米銀持合之者は勝手次第銀子にて差出候は、和市之儀は二石替御切錢之儀は如古法五石和市被仰付候事

一 寺社家御馳走之儀は惣之當り之内三步二被召上殘三步一被差除候事

一 被石えは出米被差免候事

一 二人扶持計之者えは出米被差免候一人扶持にても切方持合二人扶持より上に相候者之儀は出米被仰付候事

一 御雇衆隠居料女中之恩扶持一步引にして被遣候事

右當巳の年御家頼中旅役出米並御馳走出米共段分右之通候事

巳三月

覺

御家頼中借米銀納方唯今迄之通相違無之候尤何ぞ不分明儀も候は、支配々々より問箇條差出候上何分沙汰可被仰付候事

巳三月

四日公萩城發駕

同日毛利山城守同松次郎徳山ヲ發シ出府ノ途ニ就ク

六日都濃郡徳山驛失火人家七十八戸焼亡ス

九日婦人衣服櫛笄及音信響應ニ關シ訓令左ノ如シ

覺

一 御家頼中之衣類下着之小袖金糸置箔縫結鹿子突鹿子地紅之模様染此外惣而高直之染物無用之段兼而被仰聞置候然上は右體之衣類御當地に無之筈候處内々

にては賣買仕者も有之様相聞候彌以内外共に着用被差留候條上方より取下候儀は勿論爰許にて右之品若商賣仕者於有之は一應被相咎其品早速可被取揚候事

一婚禮之日計新婦之小袖地紅之模様染被差免候得共一日之着用之ため高直の染物求候段當時費之儀其上右衣類所持仕候ては不心得之者は不圖御法相背候基にも相成儀旁向後全新婦之着用被差留候事

一木綿之衣類にても高直之模様可爲無用由被仰聞候處近年色々手を込たる物數寄之染物着用之者有之甚以不宜風俗に候向後大概上着は無地を相用ひちらしを付候は、所々少宛之小色入候分は不苦候紋所之外鹿子入一切被差留候事

附向後縫紋被差留候事

一帷子之儀是又紋所之外鹿子入被差留候事

但木綿之衣類帷子ともに只今所持之分俄被差留候ては還而不勝手之事候故持合之衣類は今來年中着用被差免候尤新規に染調候分は只今より被差留候

此段紺屋共えも手堅沙汰被仰付候來る未の年よりは新古之無差別今度被仰出候通堅可被相心得候事

一御一門老中以下千石迄之家老之妻女局等召仕之女房以上之衣服近年紛れかはしき様に相聞候兼而御仕法之通肌着計は日野紬着用被差免候帶之儀只今迄は紗綾縮緬以下被差免候へとも當時儉約之儀故右之品被差留龍紋飛紋羽二重日野紬之間身體相應に着用被差許候事

一御手大工御扶持被遣候諸細工人且又 御目見被仰付來候有限町人之妻女肌着一ツ紬類被差免候得共向後被差留候帶は加賀絹郡内被差留日野紬類計被差免候事

附り町年寄添年寄役中並町醫者法體之町人同様之事

一諸土之妻女を始末々迄も近年目立たる鼈甲玳瑁之櫛笄又は様々之かんざし等相用風俗之妨に相成候依之自今かんざし一切被差留櫛笄は木竹水牛角類之外鼈甲之類來る四月九日より被差留候然上は此後密に商賣仕段於相聞は一廉被

相答其品をは被取揚候事

但櫛笄木竹角類相用候共平蒔繪之外高直之高蒔繪又は金かい等遣候儀堅被差留候事

附り陪臣足輕以下其外町人百姓之妻女は蒔繪之櫛笄無用之事

右享保九年諸事品定被仰出候内女中之衣類當時儉約之折柄不相應之儀も有之且漸々風流物數寄之品相増風俗之妨に相成候故改而右之通被仰付候條銘々家内々々え手堅可被申付候此外は前々之御仕法無相違候此段御目付中えも念を入晝夜氣を付候様にと被仰渡候事

寛延二巳三月九日

一金糸箔置縫地紅之模様染等之衣類着用被差留候儀然者爰元にて賣買無之筈候處内々商賣仕者有之様に相聞候向後右體之賣買仕者於有之は一廉被相答其物色をは可被取揚候事

一女中木綿之衣類高直之染物無用之段は前々より被仰聞たる儀候向後ちらし物紋所之外鹿子入被差留ちらし模様も手を込たる染物一切被差留候所々少宛小色入候分は不苦候事

附り帷子爰元にて染調候分大概同様之事

一近年鼈甲玳瑁之櫛笄或は様々のかんさし等賣買有之候今度右之品被差留候條自今内々にても商賣仕者有之候は、是又急度可被相答候事

一右類之櫛笄被差留此後水牛木竹角類相用候様被仰付候然は木櫛笄ともに平蒔繪之外高直之高蒔繪金かひ等遣候儀堅被差留候諸士之外は蒔繪一切被差留候事

但右之段は爲儉約之被仰出候儀然上は此以後木櫛等之直段只今より高直に賣拂候におゐては可爲曲事候

右之廉々商賣方之者共に念を入沙汰相成候様にとの御事
覺

音信贈答は近親族は各別之儀對役儀他門より音物可差送儀無之人々其慎も有之

第一役人受納仕筈に無之候且振廻等之儀も親類交りの外役儀所勤之面々は一入可有遠慮事候縦無據相談之儀有之候共酒飯全可爲無用候此段氣を付候様にと御目付中にも被仰聞候事

右之通急度觸等には不及候條向々に内意相達候様との御事

巳三月九日

四月四日公着府

八日大坂邸國元ヨリ運送米遲着ノ爲メ倉米支出遷延ニツキ邸吏三木權太夫大坂邸

濱方中買人等ト折衝ヲ重タルニ中買人ヨリ町奉行所へ訴狀提出セシ顛末ノ詳記アリ長文ナレハ略ス寛延二巳年三月ヨリ同三

十六日山縣彌八ニ右筆副役ヲ命ス

十八日毛利松次郎山城守德山ヨリ出府ニヨリ吾邸ニ招キ櫻應セララル松次郎へ刀吉兼

代金三寸五兩長並附屬品ヲ進セララル

廿一日櫻田邸玄關新築落成ニヨリ工事ニ關スル吏員ニ料理ヲ賜ヒ下付金品左ノ如

シ

時服 普請頭人 銀二十枚 尾寺長 右衛門

銀五枚 福島權 右衛門

金三百匠 白井甚 左衛門

金二百匠 藤田市 右衛門

大檢使 時服 河内山 新兵衛

檢使 銀三枚 三浦彌 右衛門

中取方 江田四郎 右衛門

棟梁 銀三枚 松田甚 左衛門

治院裏老回神舍人老年辭職ニヨリ銀五枚下付

廿二日毛利山城守領地德山市街家屋大小七十八戸焼亡セリ之ヲ幕府ニ報ス

廿六日儒者草場平藏來賓ノトキ屢苦勞ニヨリ紋章拾一下付

廿八日毛利甲斐守匡敬江戸發途

五月朔日江戸留守居若年寄清水長左衛門歸國ニヨリ縮緬紋章拾羽織下付

十日松平主殿頭參覲途中德山領ニ於テ死去

十四日は日ヨリ十六日ニ至ル又十八日ヨリ二十七日ニ至ル屢大雨洪水國内田圃損

害高七萬七千三百五十石家倒二十戸餘橋流失百二十八寺一字人死四名牛馬死二頭

ナリ

廿二日公來年寛延三年歸國ハ薄暑ノ時タルニヨリ木曾路旅行ノ請願許可アリ

廿七日賀屋玄張宇田川夫人へ付セラレ數年苦勞ニヨリ銀十枚下付

廿八日家督相續並養子ノ制發令左ノ如シ大目付同狀

母出奔いたし行衛不相知其子部屋住にて罷在縦幼少にて右之譯不存候共家督相續之儀は難成候尤他え養子遣候儀は難成旨先達而相違候就夫母繼母に候は、其子家督相續並他え養子に遣候儀不苦候
右之趣寄々可被達候

五月

六月朔日公登營ノトキ六月朔日ヨリ八月十五日迄式日ノ拜禮四品以上ハ獨禮其以下ノ輩ハ一統ニ拜禮スヘキ旨大目付口達アリ

三日有馬日向守妹於安人宇田川忠女松平近江守嫡子式部へ婚姻ニツキ餞別ノ料理ヲ供セラレ祝品贈答差アリ

十日江川權兵衛發狂自殺セリ親族ヨリ跡職ノ請願ヲ爲ス家祿減少例ナルモ特旨ヲ以テ養子太郎吉無給通へ降級扶持米銀給與家續ヲ命ス

十六日救米方米窃盜人本締手子作右衛門石州ニ於テ捕縛ニヨリ是日斬首ニ處ス

十七日山添宗積去秋死去生前請願ニヨリ弟宗元家督ニヨリ其身一代十人扶持給與セラル山添宗積ハ香藩出入醫師ニテ替代ノモトニ非ス

廿六日天樹院堀内四本松舊地ニ再建本堂工事竣成ニヨリ是日靈牌遷座

七月朔日植木五郎右衛門ニ所帶方ヲ命ス

六日公用達三谷三九郎ヲ召シ料理ヲ賜ヒ召下紋章帷子下付去今年大坂ノ調達銀運轉ナキ爲メ三九郎銀五百貫目提出勵精拔群ニ因テナリ

十日松平薩摩守國元ニ於テ死去ノ報アリ江戸三邸三十間堀邸鳴物音曲三日間停止
十一日新中間頭天野安左衛門組内借米銀私借ノ趣ニヨリ糺問ノ結果給米銀沒收野

山屋敷ニ於テ斬首嫡子安大夫永ク流刑ニ處ス

十八日毛利山城守領政紊亂且行蹟不良ノ聞アリ人民之ヲ悦ハス宗藩老臣ニ即キ屢

右之日相除き申候由

右之通之由候事

同日中島忠兵衛ニ目付役ヲ命ス物頭役三浦與右衛門ニ三田尻頭人ヲ命ス

廿五日灰吹銀潰銀私賣ヲ禁ス令文略大目付回狀

廿八日記録所出頭役赤川仁右衛門番手中同僚支障ノ爲メ一人ニテ苦勞ニヨリ召下

裕上下一具下付竹田紹慶心涼院夏以來病中數月苦勞ニヨリ紋章羽織下付

同日上山右源太鷲頭小右衛門志道與三、大庭源太夫父子松浦丹宮馬來惣右衛門小幡

七右衛門賭博犯嫌疑アリ逮捕裁決家祿減セラル

九月五日虎ノ門通上水道修築薩摩小路上水道浚渫落成ニヨリ吾藩出金左ノ如シ

一小判二百四十一兩二分定

一銀十二匁四分八厘四毛

内小判八十八兩三步ト銀四匁一分二厘三毛ハ去寛延元年辰十一月樋掛浚渫

上修築ノトキ吾藩ト米津越中守年番ニ付テ吾藩倉銀ノ内カリ出シヲ以テ提

出セシニ今回支拂完了命セラレ差引殘額出金セリ

十一日粟屋主殿裏判役ヲ免シ山内新右衛門ニ後任ヲ命ス三田尻頭人乃美權右衛門

ニ公儀人ヲ命ス

十九日長崎奉行所ニ於テ俵物商賣ニ關シ交付書付左ノ如シ

唐船え相渡候俵物諸色出方相増候ため當地俵物請負方之者一手に買取候之様申

付他之者商賣不致様に此度申付候處右請負之者共願出候は下關之儀は諸國より

俵物相集り候場所に候間長崎問屋小倉屋藤右衛門紀伊國屋久次郎長崎屋彌兵衛

右三人之外俵物諸色買方不致且俵物請負人之外買取度由申もの有之候共不賣渡

様右三人之者え申渡有之様に願出候

右之段役人中より被申付置候様に致度候

九月

俵物付立

一するめ

一こんふ

一いりこ

一あわひ

一とさか海草

一ところてん草

一ふかのひれ

廿日後イニ二月二十八日トス 重就第四子友子日下窪邸ニ生ル母貞假女

同日手回物頭井上源三郎病アリ請願ニヨリ番手ヲ除キ歸國セシム源三郎所管ノ組ハ當番手中周布與三左衛門ニ管セシム

廿八日麻布邸取締ニ關シ當役ヨリ矢倉方へ訓示左ノ如シ

覺

一麻布御屋敷之儀は別に無之御下屋敷之儀何時御用に可有之程も難計儀候處
御殿廻り御長屋共に修補に怠り自然急御用有之候ても難御間合體に付て 御殿其外寛保元酉年如形修葺被仰付候然者 御殿御長屋廻り修葺は勿論常々掃除等之儀都而麻布御作事方引請之儀には候へ共守護役無之一向被明置候ては修補掃際等にも怠り御持方就不宜御沙汰之上 御殿には在番手之檢使並大御納戸手子入込被仰付埋御門東脇に有之御子様御殿之儀は 上々様方御火除

御殿にも相成儀候へは平生之御持方 御殿内同様之儀に付而爲守護役麻布御番手之御中間頭入込被仰付 兩御殿御持方之儀に付而段々書付を以被仰聞置候然處 御殿御持方之儀第一に相見候故右書付之趣 御表御殿之儀計之様に心得違も有之様に相聞候付此度改而 御子様御殿之方要文計調被仰付被差出候事

一御家御持方之爲居籠り被仰付儀候處火の元之用心に怠り千萬一聊之儀も有之候ては甚以不相濟事候故手付等之人數有之役筋入込り被仰付儀候條組之者下人等えも兼而其譯手堅念を入申付尤御中間頭日夜不怠氣を付候儀肝要候事
一掃除之儀疊有之所は勿論之儀板之間敷居鴨居等不絶掃拭ひ仕せ且一ヶ月三度宛大掃除日相定置天井小壁相より掃おろし戸障子の棧かまち等迄掃拭ひ坪之内小庭等水はき能様に下水道溝浚へ等迄時々守護役見合無怠申付候様に可有沙汰候事

附り大掃除之儀は天氣能日申付御座敷内不殘戸障子を明け終日風を入晩方

に相成戸障子を締候様に可有沙汰候事

附り御庭坪之内生垣摘立御庭木手入等迄無怠見合候様に有可沙汰候事

一御儉約御無人之御時節其上御座敷御庭廻り共手廣も就無之常々掃除番をも各別不被付置候條御中間頭支配之人遣所有合之人を以日々之掃除毎月三度宛之大掃除共に相調候様に可有沙汰候事

一大風雨等之節は不限晝夜守護役罷出御座敷内外令見分御作事方申談不及大破様に夫々に應し宜令心遣旨可有沙汰候事

右之通掃除其外無怠見合御座敷廻りは勿論惣而御園之内破損所有之節儉使役え申達時々無遲滯御方御役座え申出候様尤御中間頭交代之節は右之廉々能々申傳候様に入念可有沙汰候以上

寛延二巳年九月

熊 帶 刀

尾寺長右衛門殿

十月三日秀元公長府毛利始祖百回忌ニツキ天樹院ニ於テ茶湯修セラル銀二枚納付

十二日麻布邸大納戸役人下瀬小兵衛和智傳右衛門保管器具紛失ニヨリ審問ノ結果家祿十分一減少免職逼塞ヲ免ヌ

同日桂左近殿老中主殿嫡子部屋住ニテ手回頭ヲ命シ宍道外記同僚タラシム

同日平賀九郎兵衛開作地拜領請願セリ詮考ノ後馳走開作ヲ許可シ島開作ニテ七十丁交付セラル而シテ竣功ノ上檢地石盛ヲ爲シ半額公收殘額下付スヘキ命アリ九郎兵衛出願町數左ノ如シ

覺

一新開作地二十五町

右厚狹郡梶浦之内千瀉

一同二十町

右小郡秋穗村青海之内千瀉

一同二十五町

右三田尻田島千瀉

一同五町

右德地之内一ヶ所深谷村之内土田原四町小古祖村之内上ノ原一町

一同五反

右越ヶ濱之内濱邊名切

一同二町五反

右川上江舟山

一同二町

右前大津青海島之内高山

以上八十町

公今春江戸發駕ニ先チ開作交付ノ方法發令アリ如上請願レハ本令ノ發布ニ基

開作地御仕法書付

覺

一開作地下より御理之筋を以て自今拜領被仰付間敷之旨元文四年被仰出候へ

共御沙汰之趣有之此以後申立道理至極之儀におゐては御用地之外拜領可被仰付候事

一於諸郡御馳走開作之願被差留候段延享元子の三月御沙汰相成候へ共向後諸士地下人にて願出候は、御僉議之上御用地之外開立可被差免候左候而石盛相成其功に對し諸士へは石高之内半分或三步一拜領可被仰付候地下人へは二十箇年之間畝下被差除物切に至候は、檢地石盛被仰付其者名田に可被渡下候事附地下人御馳走開作仕立候者をは御利徳雇に被召仕候先例有之候へ共向後不及其沙汰候事

一御馳走開作被差免土地請取候間五ヶ年過候迄開立に取付不申候者願之筋捨りに可被仰付候事

一開作拜領町數之儀は御理之品によつて僉議之上可被相定候事附御馳走開作之儀も同斷

一步戻開作其外依勤功前々開作地拜領被仰付開立未得仕者えは御馳走開作被差

免間敷候事

一御馳走開作被差免候者他人は不及申親族間へも譲り候儀被差留候事
一前條之外 公儀地下共差支之儀於有之は到其節沙汰可被仰付候事
右之通被仰付儀候條以來無相違可令沙汰旨に候以上

寛延二己三月二日

益 河 内
堅 安 房
熊 帶 刀
益 越 中
毛 筑 後
穴 出 雲

步戻開作出願者下付町數定

高十石に付

附紙に 步戻十石之町數本文之通候得共檢地之節石上り次第を以て十石に不

限本知へ被結遣候御仕法に候

一一町五反 但山野田開作之分

一一町二反 但海開作之分

一三町五反 但島開作之分

右之通先年以來被遣來候分

御馳走開作町數段分

目安覺

一高五十石

附紙に 本文高五十石一步之割に可被相定候へ共一步にては本知一倍に相
成候故一步半に相積候五十石以下之分は凡此校了にて町數可被渡
下候事

但高百石に付一步半ヶ一之割方を以五十石へ當る開作高左之通

一高三十三石三斗三升餘

此高へ當る町數へ御馳走開作之町數を倍し一往引渡相成追而石盛候節左之
通引分け可被仰付候事

但此町數之儀は別紙歩戻開作渡方御仕法之積りを以定之寛延二年同三年
諸事小々之控
以下略

承應二年泰巖公所謂承應ノ二分減ヲ行フ此時ニ當リ財政頗ル振ハス士卒ニ與フ
ヘキノ俸祿ニシテ而シテ與フルコト能ハサルモノアリ既ニ與ヘタル者ヲ今復タ
之ヲ減スルニ至ル公意甚タ平ナラス乃チ歩戻開作證書ヲ作り多ク之ヲ此等ノ士
卒ニ與フ歩戻開作證書トハ公益ニ害ナキ以上ハ何レノ土地ヲ問ハス自由ニ新田
ヲ開作スルノ權ヲ與ヘ而シテ地ヲ得ルニ從ヒ其俸祿ヲ増加スルヲ約スルノ證券
ナリ此證ニ據テ藩士ノ自ラ開拓セルモノヲ歩戻開作ト謂フ地下ノ人民ニ對シテ
ハ藩初ニアリテハ其獎勵十分ナラサリシカ萬治郡中制法ニ依レハ士卒ニ對シテ
ハ頗ル開作ヲ自由ニセルモ農民ニ對シテハ所謂本名田ノ耕作ニ支障ナキ者ニシ
テ初メテ之ヲ許ス而シテ藩士ト雖トモ給地ヲ得タル者ハ其地域缺損アルモノニ

限リ其石高ヲ補フノ程度ニ限リ之ヲ許スノ意ヲ記セリ

十六日公松平兵部大輔ノ病ヲ訪ハル

同日自付役赤川忠右衛門心涼院病中苦勞ニヨリ紋章上下一具下付

廿一日松平兵部大輔死去是日ヨリ二十五日ニ至ル江戸三邸三十間堀邸鳴物音曲停
止

廿二日吳服方濃物方兩藏保存品掃除等ニ關シ當役ヨリ矢倉方へ訓示左ノ如シ

覺

一吳服方濃物方之儀は第一御献上物内實は不逮申仕立旁別而入念並御殘其外諸
御進物間違等無之様役人下手子に至迄身に引懸令心遣候儀肝要候自然間違有
之段縱其所之役人は申分け相立他之役所之沙汰落に相成候ても 公邊之儀に
おゐては 御爲不宜候條掛り相之諸役所乞合等相互に隨分氣を付間違無之様
に兼而心得候やうに可有沙汰候事

一吳服方請之金入其外端物等夏之中天氣能時分數日風入取置候節も敏なと寄り

不申様に熨疊致させ且時々御見分等差出候は、追而御藏入仕候節も右之通念
を入御仕着せ物御貨物類新敷物は是又風入仕古き替相成候品々も晴天に干立
御藏入致置汚朽候物をは御本番手中も可成ほとは湯なと掛させ置染替張上げ
等致させ候へは又々御用に可立物々をは御留守番手に至り早速染替等仕せ奉
書其外紙類不揉様に取惱諸事無緩令心遣候様に可有沙汰候事
一於濃物方は御國より御仕送相成候干物類其外不損様に節々氣を付物に依り折
々晴天に干徹等出不申やうに手置入念候儀肝要候事
一右手置之爲兩御藏共棚なと無之所は此度釣整させ干物置所座を張せ其外加少
補させ候條御藏内之物々此上聊無緩手置仕取惱手荒く不仕様に可有沙汰候事
一兩御藏共向後は一季之内一度宛年中四度御用靜成時分二階下藏共大掃除申付
取亂候品々櫃箱等至迄夫々之置所へ取直し惣而兩御藏内不取散様に可有沙汰
候尤大掃除相調候は、早速御藏内頭人可被致見分候若即日差向御用有之見分
不相成候は、翌日必有見分候事

右御藏内手置入念 公損に不相成様に頭人も心を付常々役人令心遣且御藏内不
掃除に無之儀役人中勤方之肝要候由度々書付を以被仰聞候へ共御當用多候故掃
り念を入候計にて手置掃除等之儀迄は届兼候様に相聞左様も可有之事に候得共
物々手置不宜取惱手荒く候ては大段之 公損勿論之事候間兩御藏共に御國其外
より御仕送物到着之節一通り之取始抹耳ならず手置之儀肝要之儀候條御手前役
座御用方檢使立合其物色内實等惣而何廉之儀氣を付被申談御藏入等可有沙汰候
且又毎日一度宛御用方檢使被申談兩御藏内手置其外見分可被仕候勿論御獻上物
其外御仕送物到着之砌又は長雨等之節は例月之外にも罷出見合可被申候右之廉
々御本番手御留守共に向後怠慢無之様に頭人役人交代之節は連々可被申傳候以
上

寛延二己年十月二十二日

熊 帶 刀

尾寺長右衛門殿

日不詳明倫館前馬場ニ於テ正月十二日諸稽古初ニツキ向後乘馬初行ハレタク明倫

館本締境小右衛門伺書ニ對シ刎紙指令左ノ如シ

一明倫館前於馬場馬乗初之儀來午の正月より後年共に正月十二日諸稽古始同日に被仰付候尤十二日雨天候は、乗初之儀は延引被仰付追日乗初之節當役中も罷出候様に被仰付候

一館中稽古例月一度宛爲見分當役中罷出候付其時分乘馬をも見分被仰付候正月は諸稽古初之節罷出其後は不能出候付乘馬之儀も右之通被仰付候

一馬乗初之儀御在國候節は檜崎半藏折下喜左衛門兩人え被仰付候御留守年には半藏喜左衛門兩人間御國に居候者え被仰付候尤弟子之内一兩人同道罷出乗初仕候様被仰付候

右之通可有沙汰候事

十一月朔日手回頭乃美仁右衛門家計窮迫ニツキ辭職ヲ許シ班席ハ手回頭次座トナ
ス

三日毛利元康百五十回忌厚狹洞玄寺ニ於テ法會修行ニツキ香奠銀三枚下付

四日ヨリ五日ニ至ル大照公百回忌青松寺ニ於テ取越法會修セラレ銀十五枚米二十俵殉死者八人回向料トシテ銀五枚納付二日ヨリ四日ニ至ル天樹院ニ於テ三百部讀經

五日滿散法會修行三日殉死之輩法會九日囉子七番催サル殉死ノ家寺詰並供物人名左ノ如シ

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 梨 羽 頼 母 | 小川 貞 右 衛 門 |
| 信 常 浪 江 | 山 名 宇 右 衛 門 |
| 村 上 三 郎 左 衛 門 | 祖 式 次 郎 兵 衛 |
| 三 郎 左 衛 門 父 | 村 上 數 之 助 |
| 久 保 五 郎 左 衛 門 | 五 郎 左 衛 門 子 久 保 清 大 夫 |
| 梨 羽 頼 母 山 本 又 兵 衛 | |

大坂留守居生田八郎右衛門ヲシテ高野山安養院へ代詣セシム
法會ニツキ赦罪行ハレ歸島命セラレ、モノ左ノ如シ外ニ輕卒九人

米田平助

養父郡田中又右衛門

都尉仁右都野平兵衛

十六日毛利松次郎山城守數馬ト改名又將軍へ謁見請願許可ニヨリ數馬へ太刀馬代干鯛一箱樽代金百匹進セラル

十七日反古屑賣却及麻布氷川明神境内歩行ニ關シ訓示左ノ如シ

御屋敷外より罷越候商賣人え反古くす賣候者も有之やうに相聞候向後一切被差留候者不心得之者有之反古くす賣候段相聞候歟又は見當候は、早速及御沙汰候様にと御目付方え御沙汰相成候間足輕御中間以下又家來末々迄右之段手堅申聞せ候様にとの御事

右之通支配々々え内意申達候様にとの事

麻布氷川明神之境内近邊致繁昌茶屋々々に遊び女なども居候様に相聞候付而御家來中參詣は各別兼而御法度有之候條彼邊茶屋え立寄酒にても吞候儀は被致用捨候やうに先年御家來中え内意被仰聞候然處其後茶屋解拂相成又々茶屋相建先

年之通段々繁昌之様子に相聞候間前廉御沙汰相成候通被相心得候様に内意申達候様にとの儀候尤麻布御中屋敷宇田川日下窪被相勤候衆之儀も右同前被相心得候様にとの儀候右之趣御目付衆えも被仰聞置候付而御内意申達候條此段御支配中え可被仰達候事

十一月十七日

廿五日公官位昇進之件依頼ニ關シ聞老堀田相摸守へ軸物二幅對共左右頼庵筆同二幅對共左右土遇筆同二幅對共左右遣ラル

十二月朔日毛利數馬廣矩始テ家重將軍ニ謁ス

十九日毛利甲斐守室分婉女子ヲ生ム

廿五日貨幣ノ制發令アリ畧徳川實紀

同日下乗及從者ノ制發令左ノ如シ

諸大名下乗場所之儀前々と違猥に成候に付向後は國持大名たりといふとも大手之方は張番所東角を限り内櫻田之方は張番所向御堀端東角を限り被致下乗可然

候

右享保三戌年相觸候通彌此趣可被相心得候以上

十二月

下馬より下乗橋迄召連人數之覺

一四品及十萬石以上並國持之嫡子侍六人草履取一人挾箱持二人六尺四人雨天之節は傘持一人

一萬石以上より侍或は五人或は四人應分限此内を以可被列候草履取一人挾箱持一人六尺四人雨天之節は傘持一人

下乗より内え召列人數之覺

一四品及十萬石以上並國持之嫡子侍三人

一一萬石以上嫡子共侍二人幼少之面々は外に介添一人可爲勝手次第候

右草履取一人挾箱持一人

但挾箱は中御門外に可被殘候

雨天之節は傘持一人

一諸番頭諸物頭布衣以上之御役人並中與御小性衆三千石以上之寄合侍二人草履取一人挾箱持一人雨天之節は傘持一人

一三千石以下之寄合布衣以下之御役人中與御番衆惣御番衆侍一人草履取一人挾箱持一人雨天之節は傘持一人

一醫師侍一人草履取一人挾箱持一人藥箱持一人雨天之節は傘持一人

一御城に部屋無之面々は挾箱中御門外に可被殘候事

但御役人は可爲唯今迄之通事

一江戸中往還之節供廻り小勢に可被列候縦國持たりといふ共駿馬一騎か二騎供鍵二本か三本に過へからす惣體又者等輕可被列事

一九千石より五千石迄侍七人か八人

一四千石より三千石迄同六人か七人

一二千石より千石迄 同四人か五人

一九百石より三百石迄同二人か三人

一二百石 同一人か二人

一五千石以上は押足輕二人

一三千石より四千石迄押足輕一人

一三千石以下は押足輕二人

但番頭並芙蓉之間御役人は押一人

一輕輩長柄傘無用たるへき事

一陪臣之輩召連候供之者右人數准し彌小勢に可被申付事

右之越急度可被相守候惣體供之者風俗目立不申候様作法宜申付道をも互片付通り之障に不能成様可被申付候

一御城内外召連候供廻り等之儀先年被仰出候處に近年猥に成候間享保三戌年被仰出候彌相守可被申候以上

十二月

廿七日屋敷違變並改名繼目家督等ノ事屋敷改ニ届クヘキ旨享保四年發令ノ通ト令セリ大目付同狀

晦日春日大宮司波多野宮内祖父宮内大輔在職中阿武郡社家徳倉右近父ノ許狀吉田家ノ判形疑シキ旨吉田家ヨリ通報アリ諸郡社家中搜索セラレシニ不審ノ許狀十通切紙物十一通發見公收ノ上吉田家へ送付セシニ皆偽造許狀タルコト明瞭セリ根本宮内大輔惡計ニハ非ラサルモ兩國社家棟梁トシテ疑シキ許狀審査ヲナサス傳達セシハ同類ノ罪遁レカタキニ因リ逼塞家名斷絶ヲ命ス依テ熊野七右衛門弟助之進中麻原ト改稱シ更ニ春日社職ヲ命シ社役怠ナカラシム
日不詳此月市中其外宿札始ル草會年表

參考 遺徳談林所載公御步行ノ時萩諸侍屋敷被遊御通路家々ヲ近臣ニ御問名前被聞召能家ハ役人ナリト御噂有之由其後屋敷毎ニ名札ヲ門へ可出ト被仰付今以其例ナリトソ

毛利十一代史卷之六十八

大田報助編次

觀光公記十一

寛延三年庚午正月公江戸邸ニ在リ

七日供從之輩ニ戒飭訓示左ノ如シ

御駕籠廻り御供の諸士中はいふに及す其外前後罷越候面々行規作法能於御出の御先方並御途中も聊の儀無之様に銘々常に心懸候段勿論の事候萬一不意の儀有之節は其時々の見渡を以取捌仕候はて不相成儀尤御供頭添肩衣役より差圖も可有之候へ共兼而吟味工夫等も仕可令僉議候差懸候ては不行届儀も間々有之候御登城其外にても一切込相の場所にては行列延縮の懸引の儀も銘々其心得にて役座の階級又は筆並等も候へは氣を付相候儀肝要の儀候旁此段能々申聞せ置候様にと被仰付候事

同日大坂町人御屋代薩摩屋仁兵衛出府此日公通掛謁見料理ヲ賜ヒ銀二枚下付

十二日毛利數馬山城守子嫡子 炮瘡酒湯式終了ニヨリ二種樽代金五百匹遣ラル

廿四日百姓強訴に關し發令左の如し大目付同狀

國々私領之百姓年貢取筋或夫食種貸等の願筋に付領主地頭城下陣屋又は門前へ大勢相集り訴訟いたし候儀近來間々有之由相聞へ候都而強訴徒黨又は逃散候儀は堅停止候處不届至極候自今以後右體の儀有之におゐては急度遂吟味頭取並差續事を工み候者夫々急度曲事に可被申付候
右之通向々可被相觸候

午正月

廿八日大組物頭吉田八右衛門澤瀉紋章入質セシヲ發見セラレ判決ノ後免職逼塞ヲ命ス二宮源右衛門ニ大組物頭ヲ命ス

二月六日赤阪溜池端大下水浚渫ニヨリ吾藩半高十八萬四千七百石ニ對スル出金銀六百五十三匁八分四厘納付セリ

十一日紋章入質ニ關シ訓令左ノ如シ

覺

内證不勝手之面々近年御紋の品をも入質等に遣候儀も有之様に相聞候御紋の儀は分而御心入の品に付於下も別而太切に仕候はて不相成儀勿論候たとひ逼迫令困窮いかほと外の作略不相成とても御紋の品入質等に可仕道理全無之筋候處に重き御心入をも令忘却失實儀甚以不謂儀候若向後右體の不心得於有之は相知次第急度可被及御沙汰候事

附り御紋の品着用の儀兼而被差免候物切も有之儀候處近年代役の身柄にて着用仕候面々も有之様に相聞甚不心得の至候代役の儀は本人幼少御役歳不能成内歎又は本人病者にて當分御役難勤付而其内代勤の事に候へは本人の爲に親又嫡子と申にても無之本人御役相勤候期に至り代勤讓返の上は最前の身柄に戻る事候然は本人の家には有之御紋の品代役の身柄として着用可仕筋にて無之候條若向後不心得にて着用仕もの於有之は急度可被及御沙汰候事

以上

午二月

十二日當職益田河内國計ノ窮迫ヲ憂ヒ又身體困憊ノ爲メ辭意アリ公歸城ノ後別人ヲシテ整理ノ局ニ當ラシメント精細ノ政見ヲ齎シ右筆柿並半右衛門所帶方矢島半左衛門ヲ出府セシム

廿八日粟屋丹治三浦左内伊藏源左衛門數年近侍ニ奉仕勤勞ニ因リ各銀七枚下付小川宗順麻布邸番醫苦勞ニ因リ時服二下付

日不詳正月十一日同廿五日連歌懷紙ニ關シ記錄所出頭役ヨリ大納戸役及圓明院へ訓示左ノ如シ

正月十一日御連歌御懷紙

一享保二十年御懷紙一綴

一元文二年同斷

一元文四年同斷

一元文五年同斷

一元文六年同斷

一寛保四年同斷

一延享二年同斷

一延享三年同斷

一延享四年同斷

但日付正月吉日と有之

一延享五年同斷

一寛延二年同斷

一寛延三年同斷

以上十二綴

右於江戸正月十一日御連歌御懷紙年々之分此度僉議被仰付候處享保廿年以前之御懷紙都而無之二十年以來之分も連綿無之前書之十二綴計有之候依之御沙汰之上右十二綴之御懷紙改而大御納戸藏へ納置候様就被仰付候相渡候尤御在府中並

江戸御留守年之分とも其時々記録所より渡方被仰付候條於御大納戸此度別帳
を拵右十二綴之御懷紙付記自今以後年々御懷紙取下ケ右根帳え付記無紛失念を
入後役代交之節無相違申傳候様にとの無事

寛延三庚午二月

赤川仁右衛門
兒玉市之助

河北九左衛門殿
志賀彌三兵衛殿

正月二十五日御連歌御懷紙

- 一享保八年御懷紙一綴
- 一享保九年同斷
- 一享保十一年同斷
- 一享保十二年同斷
- 一享保十四年同斷

- 一享保十五年同斷
- 一享保十六年同斷
- 一享保十七年同斷
- 一享保十九年同斷
- 一享保二十年同斷
- 一享保二十一年同斷
- 一元文二年同斷
- 一元文三年同斷
- 一元文四年同斷
- 一元文五年同斷
- 一元文六年同斷
- 一寛保二年同斷
- 一寛保三年同斷

但日付正月二十三日と有之

- 一寛保四年同斷
- 一延享二年同斷
- 一延享三年同斷
- 一延享四年同斷
- 一延享五年同斷
- 一寛延二年同斷
- 一寛延三年同斷

以上二十五綴

右正月廿五日於圓明院御連歌御懷紙櫻田御殿え相納り候分共此度改被仰付候處
 享保八年以前之御懷紙都而無之八年以來之分も連綿無之前書之二十五綴計有之
 候依之御沙汰之上右二十五綴之懷紙改而圓明院え納置候様就被仰付候相渡候後
 年は御懷紙一通り調被仰付一應櫻田御殿差出左候而其御懷紙圓明院え年々渡方
 被仰付候御留守年之御懷紙御國え差下に不及直様圓明院え納置候様被仰付候條

於圓明院此度根帳を拵右二十五綴之御懷紙付記自今以後年々御懷紙取下け右御
 根帳に追々付記無紛失念を入住持代々無相違手堅申傳候様にとの御事

寛延三庚午二月

赤川仁右衛門
 兒玉市之助

圓明院

三月十一日毛利甲斐守匡敬第五子徳次郎日下窪邸ニ生ル母利尾
 十五日所帶方矢島半右衛門右筆柿並半右衛門國元ヨリ出府苦勞ニヨリ各金二百匹
 下付

十八日中山與右衛門嫡子與十郎澁木九右衛門嫡子十藏玉江坂ニ於テ百姓兩人ノ慮
 外ヲ怒リ直ニ斬殺ス死骸交付ノトキ引證トナスヘキ腰刀ナキハ失態タルニヨリ與
 十郎十藏ニ逼塞ヲ命ス 行相記録八月廿一日ノ命令トス

十八日神田筋遠橋外ニ於テ觀世大夫勸進能開催ニツキ請願アリ先格ノ如ク吾藩ヨ
 リ棧敷ヲ設ケラル、爲メ料金十五兩交付觀世大夫へ表面ノ祝銀二十枚ノ外銀三十

枚交付又常ニ出入ノ役者中へ祝金差アリ

廿三日毛利秀包百五十回忌吉敷玄濟寺ニ於テ法會修行ニヨリ毛利市正へ使ヲシテ香奠銀三枚下付セシム

四月三日瑞聖寺戒壇堂六年前烏有ニ歸ス今回再建ノ爲メ勸化許可ニツキ大目付ヨリ回狀アリ

四日大番粟屋作右衛門式臺當番ノ外加番百餘日勤務ニヨリ銀二枚下付

同日毛利數馬前髮ヲ執ル太刀小馬代二種金五百匹進セラル

六日服部七郎右衛門先代以來近侍勤務元文三年ヨリ奏者役勤績ニヨリ銀三枚下付

十一日江戸留守居清水長左衛門長壽夫人裏老國重九郎兵衛宇田川夫人有馬左裏老

東條九郎右衛門毛利甲斐守母性善院裏老赤川忠右衛門へ黒印令條ヲ授ク

十三日ヨリ十五日ニ至ル大猷院殿百回忌日光山ニ於テ法會修セララル上野本坊へ白

銀五枚納付

十六日紀伊國坂下上水大樋修築ニツキ出金銀四百四十三匁二分九厘納付

十九日ヨリ二十日ニ至ル大猷院殿百回忌氷上山ニ於テ法會執行セララル

廿日將軍東叡山大猷院殿靈前參詣ニツキ公豫參ヲ勤メララル

廿一日諸大名惣出仕大猷院靈前へ香奠白銀三枚納付

廿二日公歸國暇ヲ賜フ

廿三日仙洞御所崩御櫻町天皇使者神保與右衛門ヲ上京拜弔香奠白銀十枚ヲ泉涌寺ニ獻

納如例

廿七日ヨリ五月二日ニ至ル鳴物停止廿八日諸大名惣出仕

廿四日麻布邸修繕工事苦勞ニヨリ寺尾長右衛門ニ金三兩津田六郎右衛門ニ銀百五

十目中島平兵衛ニ銀百目下付

廿七日公江戸發駕

五月十四日公大津一泊十五日京都ニ赴クヘキ豫定ナルモ是日大津驛幕府茶壺止宿

ニ由リ大津旅館ニ泊セス伏見ニ出テ十五日伏見ヨリ京都ニ至リ吾三條邸ニ入ラス

直ニ諸司代候問仙洞崩御諒問中ニヨ尋テ嵯峨二尊院ニ詣シ綱廣公息女竹子。櫻司房輔政所菩提所又伏